

---

# とある奇跡の平行世界

雨宮茂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある奇跡の平行世界

### 【Nコード】

N2125X

### 【作者名】

雨宮茂

### 【あらすじ】

原作・とある魔術の禁書目録

の二次創作。

とある奇跡の平行世界パラレルワールドです。

物語は学園都市、LEVEL5の麦野沈利と上条当麻が出会った世界。本当にパラレルワールドです。原作と一切関係ない上にストーリーも違います。

今回のカップリングは上麦。つまり上条×麦野です。

こんな駄文の作品を読んで下さる皆様に御礼申し上げます。

## 出会っていきなり

「アハハハハッ！！どおした！さっきの方が粋が良かったぞ！！」

「ガハッ……や、やめ、ああああギイヤーアア！！」

男の腹を貫いた電子の極光は周りの肉をブスブスと溶かし焦げた異臭を漂わせる。

「……本当にゴミだな」

先程までサディステイックに染まった女の顔は今は無表情で、無惨に命を散らした武装集団の一人は裏路地の生ゴミになっていた。

詰まらない。残虐と惨殺を繰り返し、電子を操る女王はそう呟く。

だいたい先に絡んできたのはこのチンピラのだが、余りにも小物過ぎた。

「毒を喰らわば皿まで、殺される覚悟も無いのに闇に浸かってんじやねえよゴミが」

何も言わない物に麦野は未練も無ければ後悔さへない。ただあったのは、虚無感だけだった。

その場を去る時ふと、空を見上げ震えた声で呟いた。

「私は……もう無理なのかな？」

ざわざわと耳鳴りがする。重い足取りで歩くなかふと、思い出したのは今朝の事だった。

『もう君の能力 原子崩し は進展しないだろう。まあ心配しないでいい工業分野では 原子崩し は貴重だからね。今の位から - -』

.....  
ねええよお

関係ねえええんだよおおオオオオオオオオ!!!

私はLEVEL5だ!  
学園都市LEVEL5の 原子崩し 麦野沈利だツ!!!私より上位の奴なんていらねえんだよ。なのに三人も居やがる!!!

認めない、認めないツ!!!

私の能力がこの程度だなんて認めてたまるかアアアアツ!!!

激情のまま研究所を出て、虚無の思いで迷い込んだ学園都市の裏の道。

真っ暗闇。

そして、知らずに絶望した。自分はどんなに足掻こうとも生きていけないのは闇が付纏うこのクソツたれな世界だけなんだと。

どんな顔をして歩いていたらんだろう？気付けばLEVELOに絡まれていた。経緯？覚えてなんていない。どうせテリトリーに入っただけだ。

そして爆発した怒りと理不尽な憤りをぶつけ二度絶望した。人殺し、でしか私は存在意義が獲得出来ないみたい。

ガン！となにか蹴ったが見えない。空き缶かなにかだろう。誰にも気付かれず消えていった何かに私は寂しさを覚えた。

誰も見てくれない。

……………ああ

「そつだ。……………私も消えればいいんだ」

そうすれば少なくとも、もう序列や自信のプライドに追われることもない。

どこにしようか？

死ぬのは一人がいいな。誰にも見られず、知られず。ただ静かに……

力の入らない足で歩き出す。

咽せかえるような漆黒は何も言わず私を包んでくれた。生きることが否定してくれた気もした。

行こう、終わりまで

夜風が髪を乱す。それを気にすることも出来ないくらい麦野の心は真っ黒になっていた。

原子崩し

LEVEL 5

第四位

その肩書き全て他人と比較するようなものだった。

破壊の能力は他を圧倒するために、希少なLEVELは他を抜かし見下すために、そして第四位という地位は……さらなる向上を可

能にする数字だった。

いつも何かと誰かに麦野は立ち向かいハードルを越えてきた。確かに最近行き詰まってはいたが、第三位を超えるという“御坂美琴に向けた”目標は少なからずあった。

いつも壁がある理由は他のモノがあって確立されていたのだ。

しかし、今はどうだろう？

能力の成長。LEVEL5である麦野はもう成長出来ない、と踏んでいるかもしれないが少しばかり違う。演算能力、能力持続時間、精密な能力行使。

こう言った成長もLEVEL5には存在する。だが麦野はもう今のレベルから次に進めない。

初めてぶつかった自分自身という壁。初めて直面した己との競争。

天才とは不器用な生き物だ、と思う。

幼い頃から躓き、転げる事をしらない麦野には今の状況は地獄も当然。初めての躓きの対処法が解らない。頼れるのは自分の筈なのに、躓いた原因も自分なのだ。

負の連鎖から逃れられない。見つけ出した答えは、逃げだった。

いつの間にか無風になっていた。そしていつの間にか、河川敷に立っていた。



「水死体、か。……嫌だなあ」

思わず微苦笑した。まだこんなこと考えてられるのか。自分の凶太さに半ば関心、半ば呆れ。

麦野はサンダルを脱ぎ捨てると川に足を下ろした。6月と言えど冷たくて、肩が震えた。

チャプ……、と暗い世界に水音が消えていった。

昨日の雨で水嵩が増え流れが急になった川は中央に進めば進ほど流れが速く、流されそうなのを耐えながら麦野は水の中を進む。

腰が水に浸かったとき、誰かに思いつきり腕を引かれた。

「何やったてんだ、アンタ！」

「はあ！？」

後になって麦野はなんで人がこんなに近くにいて気付かなかった自分後悔した。

「こんな時期に川に入るなんて自殺行為だぞ！早くあが」

「うるせえ！その志願者だ関係えねえだろ！」

街灯で僅かに見えたのはツンツン頭の青年が怒ったような焦ったような表情だったが、言い終わらぬうちに返された麦野の言葉ではっきりと怒りに染まった。

「馬鹿野郎ツ！テメエ自分の命をなんだと思ってる、少しは考えたことあんのか！」

「なんで説教されなきゃいけないんだ！私の命だ、私が好きに使って何が悪いんだよオオオツ！！！」

パン！と鋭い音が鼓膜を震わせる。

「なにが好き勝手に使っていていいだ！命は物じゃねえんだ。もっとよく考える！！！」

「っの野郎！テメエ尻の穴増やしてやる！！！」

水に浸かった腕を振り上げると麦野は数十センチ先の青年に向かって手を翳す。

が、しかし

「あああッ！」

川底の小石に足を滑らせ 原子崩し を撃つより先に流された。

「うわああ！」

ついでと言わんばかりに腕を掴んでいた青年も踏ん張れず、予想以上の川の流れに巻き込まれる。

水の中は目を開かれない。しかし右腕を掴む感覚に麦野は心の中で盛大に罵倒した。

離しやがれこの説教魔神がああアアアアア！！！！

息が苦しくなる。しかし助かる訳にはいかない。麦野は最後の力で右腕を振ったが青年の手は決して彼女を離さなかった。

意識が擦り切れ力が抜けていく麦野をその手が水面に引き上げる。

「プツハア！あー、死ぬかと思った」

「うつ！ゲホツ、ハア……ハア！……なんでだよ」

「あ？なんですか？」

「なんですか？じゃねえええんだよお！勝手に偽善押し付けやがって迷惑だ！風穴空けられねえと解らないのかアアアア！？」

緩やかな流れの所まで引きずられた麦野は青年の胸倉を掴んだ。

「違うな。解ってないのはアンタだ」

「……いちいち説明してやらねえと理解出来ないのか……。このクソガキがア！」

「死んでどうなるんだ！逃げてるだけじゃなんも変わんねえぞ！」

口論は激しさを増し青年も麦野の胸倉を引き寄せた。息がかかる程近い距離。そう変わらぬ視線。

青年が見たのは、

名も知らない彼女の絶望と虚無、やり場のない怒りに濁った瞳で、

麦野が見たのは、  
名も知らない青年の誰かの為に怒り悲しめる澄んだ瞳だった。

この青年が助けに来たときから分かっていたこと、それは彼は“表の住人”であること。

人一倍プライドの高い麦野は青年の腕を弾き押さえていた衝動を突き動かした。

「もういい。死ね」

青年には光が爆発したように見えた。

「うおおっ!!」

パキィィィン!!

砕け散る音と共に麦野は目を見開いた。

「な、テメエ何者だ!!」

「上条さんは、ただのLEVEL0だよ」

「巫山戯んなアアア!!」

麦野は距離を取ろうとするが水の中は思うように動かない。そして上条は麦野に近づき左手を取った。

「ほら、上がるぞ。風邪引いちまうからな」

「なんでだよお……」

泣き出してしまいそうな震える声に上条は振り向くと麦野は瞳にいつぱい涙を溜めていた。

「おい、泣くなよ……な？」

「なんなんだよ。この世界は私に死ぬことさえ許してくれないのか？」

「……………」

何かに潰されそうで、迷子のように孤独な人を、上条は静かに抱き締めた。

なぜだか、こうした方がいい気がしたからだ。昔、小さい時に一人で寂しくてどうしようもなかった時、母決まって優しく抱き締めてくれたことを上条は思い出した。

「泣いてもいい。誰も居ないから」

「お前がいる」

「あー、あれだ。上条さんは人形かなんかだと思って独り言でもいいんじゃないですか？」

「……………そうね」

麦野は上条の胸板に顔を押し付け、小さく泣いた。いつの間にか腰に回された手は彼を離すまいと強く、固く握り締められていた。

上条は、そんな彼女の肩を強く、固く抱き締める。そして耳元でそっと囁いた。

「生きてくれ。死ぬなんて馬鹿なことしちゃ駄目だ」

「うう……あああああ！！」

夜の帷を掻き乱す彼女の悲鳴のような泣き声は響いた。

それから何分たっただろう。麦野は上条からそっと離れると、まだ潤んだ瞳は前よりすっきりしているように見えた。

「なんか、変なことに突き合わせちゃって悪いわね」

「いいよ、思いとどまってくれたならそれで」

「流石にこれ以上水に浸かるのさヤバいわね。上がるよ上条」

「はいはい、……ん？」

「どうしたの？」

硬直した上条に麦野は首を傾げ、上条は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「いや、名前知らなくて。教えてくれないかな？」

「……麦野、沈利。あんたは上条なに？」

「当麻。上条当麻だよ。よろしく麦野さん」

差し伸べられた右手に麦野も応えるように右手を差し出す。感じた温度は冷たくて二人揃って驚いた。

「冷たいな麦野さん」

「馬鹿、上条だって冷たいんだから。ほら、ぼさっとしない」

「へいへい」

岸辺に上がると空気が生ぬるく感じた。しかしそれは風が吹かなければの話で少しでも風が吹くと、また二人揃って身震いした。

「ううっ！死ぬ?!」

「流石にキツイわ。……あ、サンダルどこだっけ？」

「……買ってきましょうか？」

「かーみじょ、アンタ財布無事なの？私の携帯も財布の中身もペア」  
「よ」

「……う、今月の食費がああ……」

あまりにこの世の終わった顔をして四つん這いになった上条の背中に麦野は優しく手を置いた。

「札が駄目なら、銀行行けば替えてくれるし、カードが駄目なら再発行すれば大丈夫よ。判子忘れずにね」

「でも携帯が…」

「それなら今カップルで契約すると安いみたい。ついでだから上条の分まで買ってあげるわよ」

「いや流石に携帯は…」

「ああッ！ウザったいわね。あれだけ押し付けがましくやった割には自分には駄目です、ってかああッ？」

「そうじゃなくて」

「なら私がアンタの分まで買う、決定！言っておくけど覆さないから」

「まったくこの女王様は」

「なにか言った？」

「いえ、全くなにも言ってますん」

立ち上がり辺りを見渡し上条は腕を組んだ。だいぶ流されたらしく、ここから自分のアパートまで近い。

「麦野さん家近く？」

「うーん、遠いかな。携帯は壊れてるし、車呼べないし」

「なら俺が済んでるアパートまで来る？」



「はあ!？」

服を絞っていた麦野は手を止め、今日一番の間抜けな声を上げた。

「なに言ってるの!」

「卑しい意味ではありませんよ!ただ風呂くらい入って体温めてからでも」

「思いつきり卑しいじゃねえかつ!」

またもや極光が上条に直進する。反射的に右手を突き出し彼の知らない能力 原子崩し を防いだが麦野は厳しい眼差しをおくる。

「それに能力を打ち消す能力なんてチート技聞いたことないわよ」

「でも歴としたLEVELOだ!」

「へえ、なら何発でもブチ込んでいいのね」

恐ろしい事を口にした麦野に上条は思わず顔が引きつり、冷たいものが背中を走った。

「や、止めて。それに、ほら寒くてもう限界ですよね」

「関係ねえんだよ。カアアンケネエエنداヨオオツ!なんでテメエは 原子崩し を喰らってケロツとしてやがる!LEVELなんてちやちな問題だなアア!」

「なんかスイッチ入っちゃった?!」

麦野が標準を合わせるように手の平を上条に向け、上条は右手を突き出した。

「うぐ……」

目の前で麦野が崩れ落ちた。

「大丈夫か！」

「本格的にヤバい。……暖かいなあ、かーみじょ」

「おい！死ぬなよ。死んだら許さないからな！！」

それから先の事を私は覚えてない。ただ、当麻の腕の中がとっても温かくて安心できて、ついうつかり寝てしまった。

## 見える風景

「目が覚めたかい？」

ぼんやりとした意識の中でカエルによく似た顔をした白衣の医者を見て、私は小さく頷いた。

「そうか、良かったね？低体温症になりかけて危なかったんだよ。ほら隣にいる上条君も一応入院してもらってる」

言われて左隣を見たら、夜でよく見えなかった黒くてツンツンした頭がよく見えた。

「なにがともあれ今日中には退院できるからね。お大事に」

去って行く医者に麦野は小さく礼を述べた。

「気にする事はない。僕の事は患者を助ける事だからね？」

パタンと扉が閉められると静寂だけが麦野を包んだ。

正直、動くのも気怠いが喉に渴きを覚えベッドから起き上がる。

「絹旗達に連絡入れないと」

誰が置いてくれたか、解らない携帯を開く。やはり水のせいで使い物にならない。財布も札はふやけて濡れている。乾かせば使えるが、カードは大丈夫だろうか？

「ま、行くか」

手っ取り早く小銭を取ると麦野は自動販売機のあるフロアを目指して歩き出した。

三階フロアの暇潰しように雑誌やら本やらが置いてある小さなスペースに自動販売機があった。そこに硬貨を滑り込ませ、スポーツドリンクのボタンを二回押した。

二本出てきたペットボトルを手に取り今来た道を戻る。

静かな朝だと麦野は思った。病院全体が停止しているような無音の世界。たぶん防音がしっかりしているのかもしれない。なにも考えず歩いていると部屋の前についた。念のためノックをしておく。

「どつぞー」

返事があった。

「起きたの、おはよう」

「おはよう麦野さん」

「スポーツドリンク、飲むでしょ」

投げると上条は両手で受け取り、意外そうにペットボトルと麦野を見比べた。

……なにあり得ねえみたいな面してんのよ

しかし実際気遣う事も少なければ、性格が性格であり麦野は溜め息混じりにベッド腰を下ろした。

「ありがとう」

でも、背中からかけられた無邪気な声に知らずのうちに彼女は嬉しそうに微笑んでいた。

「どうぞ致しまして。今日中には退院できるそうよ」

キャップを捻り、取ると麦野は喉に流し込んだ。さっぱりとした甘さが冷たさと共に流れ落ちていく。口を離してみればもう半分もなかった。

「今日暇なら携帯買いに行く？」

「そうだな。学校終わってからじゃ駄目か？」

「学校、ね。高校？」

ぶはぁ、と声がして振り向くと上条は全品飲み干していた。

「そう、一年生だけ。麦野さんは大学とか？」

「はぁ？高二だけ」

「嘘?!」

持っていたペットボトルを上条に全力投球した麦野は痛みに悶絶す

る彼の腹を全力で踏みつけた。

「ゴハッ!？」

「アンタといい、絹旗といいなあんで同じリアクションが返ってくるわけ?どーして私が大学生なのよ!」

「それは大人びてるガアアアアア!」

「聞き飽きた言い訳ね!かーみじよ死ぬ覚悟決める」

絶対無慈悲の光閃はまたもや上条の右手に阻まれ幻想だったように  
原子崩し は消え去った。

「やっぱチート野郎だなテムエ」

「そんなこと無いですよ!グフツ、物理的な物は消せないンガアア  
!」

「あはははは!楽しいなあ」

「上条さんで遊ぶの止めてええ!」

取り敢えず腹部を圧迫する足を掴み退けようとして上条当麻は気づいた。着物に形の似た入院中の服から覗く美しい足のライン。そしてもう少しで見えてしまいそうな桃源郷。

上条は今までなかった程の抵抗を見せた。

「麦野さん麦野さん!お願いですから足を退けて下さい!」

「あら、ずいぶんと元気になったわね。もうちょっと遊べるかな？」

「駄目だつて！見えちゃうから！」

「見なきゃいいじゃない」

「そんな問題じゃなあああああい！！！」

手足を振り乱して抵抗する上条はさながら、ひっくり返った亀で麦野の心に火を付けた。

「ほおら、どうした？もうへばつたのか？だらしねえな」

「うぎゃあああぁ！」

「あははは、ふふふ、もがけ足掻け！もっと私をを楽しませろ！」

「スイッチ入った！絶対入ったよこの人！」

無駄だと分かっているにも抵抗せざるをおえない上条は届きそうで届かないナースコールに手を伸ばした。

「なに？かーみじよはナーズ交えてがお好み？」

「違う！助けを呼ぶんだよ！てか、麦野さん落ち着いて俺の胃と肋骨がヤバいんですけど！」

「肋骨くらい折れても死なないわよ。肺に刺さるかも知れないけどね」

「いやあああああー!!」

「萎えてんじゃねえぞ!それならまだジジイの×××の方が元気だぜえー!!」

「女の子が下品な事言っちゃいけません!」

「アンタは私の親か!」

一通り上条で遊んで上機嫌になった麦野は足を退け、ベッドに座った。上条は未だに精魂尽きたかのように床で微動だにしない。

「かーみじよ、床の寝心地はどうかにゃーん?」

「冷たくて硬いです」

「私にはこのベッドも十分硬いわ」

のろのろと起き上がり上条はベッドに倒れる。布の柔らかい感触に樂園のような世界。うっとりしながら問う。

「へえー、十分だと思っけど、麦野さんはどんなベッドで寝てるのでしょうか?」

「クイーンサイズの天蓋つきのベッド」

「ッ!……寝室ずいぶん広いですね」



「そつでも無いわよ？」

上条はこの一言で直感した。絶対広い。広い上に豪華だと。金持ちの常識は多くの場合非常識な事がある。その古典的例が今、目の前にあるのをしみじみと感じた。

「さて、服乾いたかしらね？」

「うん……どうでしょう」

「なに黄昏てんの、かーみじょ」

「はぁ……」

「駄目ね。心ここに有らずだわ」

また静かになった部屋に控えめのノック音が響いた。

「どうぞ」

「失礼します。お目覚めはいかがですか」

顔を覗かせたのは看護婦だった。

「悪くはないです。服は乾きました？」

「はい、乾きましたよ。退院はもうできるようです」

服を手渡すと看護婦は小さく頭を下げて退室した。それを見届けると妻野はおもむろに服を脱ぎ始める。

「なっ！いきなりなにを！！」

「着替えるのよ。悪い？」

「場所を考えて下さい！」

「ここ以外のどこで着替えろって？女子更衣室なんて無いわよ」

「では、カーテンをさせて頂きます」

シャツ、と金具が滑る音と布擦れの音が聞こえた。振り向けばキチンとカーテンをしており、シルエットで上条も着替えてる事が分かる。

「ねえ、携帯買いに行くのはいいけど。どこで待ち合わせするの？」

「麦野さんも学校あるだろうし、場所を教えてくださいたら迎えに行きますよ」

「学校なんて行ってないわよ」

「いやいや、高校三年生なら色々忙しい時期なはず。就職か進学かでも一大決心ですよ」

「授業内容なんてメイクしながら聞いても理解できるようなものばっかりだし、正直退屈だから学校に行ったのは一年の最初辺りね。就職、進学はどうでもいいや。あと敬語は止めて、なんか鳥肌立つわ」

メニューの最後にデザートを頼むような気軽さで敬語を使うと言  
う麦野に上条はシャツのボタンを閉めながら戸惑った。

年上、しかも女性にタメ口やフレンドリーに接する自信さへ上条に  
はない。

「あー、それはちょっと無理かも」

「川の中で散々言った割には弱腰ね。覚えてるわよ、アンタが私に  
ビンタしてくれたの。痛かったわあ、本っ当に痛かった」

どこか咎めるような麦野の声音に上条は小さくうなだれた。つい、  
とかそんな言い訳は出来ない。

彼は一応紳士なのだ。ここは素直に謝ろうと腹を括る。

「その節においては本当に申し訳御座いません！上条当麻は出来る  
限りの罪滅ぼしを覚悟している次第であります」

「そう？なら第一の命令、敬語は使つな。あんたより年下の奴なん  
て生意気言ってきたりするんだから」

「麦野さんは交友関係広いのか？」

「うーん、微妙な所ね。命令追加で麦野さんは禁止。麦野でいいわ  
よ」

次から次に来る命令は別段難しい訳でもないのに上条は戸惑った。

彼は言うほど体裁を取り繕う、と言うほどでもないのだが麦野から

感じる何かが上条の本能に語りかけていた。

危うい脆さのなかに、深い狂気が渦巻いたような言葉で表せない存在。それが上条当麻から見た麦野沈利という人間だ。

軽々しく触れてしまうと崩れ去っていきそうで、どうにも距離感が掴みづらい。

そんな思考の海に浸かっているとカーテンの奥から嘲笑めいた弱々しい笑い声が聞こえた。

「ははは、ごめんね。そりゃ、いきなりこんな変なこと言われたら気持ち悪いか。上条がいいと思う接し方でない駄目よね」

「麦野さ……いや、麦野そんなことないぞ。ただ上条さんはですね、その美人さんに知り合いがいなくて、こうなんと言うか」

咄嗟に言ってしまった事に慌てて付け足したが、もう何が何だか分からなくなり、終いには頭を抱えていると後ろから麦野が顔を覗かせた。

「かーみじょう、ありがとね」

「あ……」

初めて見た麦野の笑顔は柔らかく木漏れ日のように温かな微笑みだった。それはいつもの彼女を幼く見せたが、直ぐにカーテンの奥に引っ込んでしまった。

残念だ、もつと見たかった。そう言った感情が胸の内を巣くうとなんだか恥ずかしくなり、頭を左右に何時振ってこの思いを払拭させる。

「よろしくな麦野。あとさっきの可愛かったぞ」

「当たり前よ、素がいいんだから」

「日本人なら謙虚になるべきだろう！」

「欧米諸国では自分の感性否定されたと思って逆に怒られるわよ。過剰に返してもアメリカンジョーク？みたいな感じに受け取って貰えるみたいだし」

カーテンを取り払った麦野はベッドに腰を下ろすと滑らかな曲線を描く脚を組んだ。

「まあ、必要なのは個性よ。一人くらい居てもいいんじゃないこんな日本人」

「そう、だな。確かに謙遜する、だとか謙虚な姿勢ばかりじゃどうにもならないよな」

「でもサラリーマン業界に喧嘩売ったような台詞よね」

「んー、親父の弱腰を思い出すな。昔はなんでそんな頭下げるんだ？なんて思ってたけど、必要な事なんだな」

「いつかそんな時代がアンタにも来るわよ」

「ひ、否定できない……」

未来の予想図を展開させた上条は、今まで見てきた仕事での謙遜した父に自分を重ねよく分からない焦燥感に駆られた。

その引きつった上条を見て麦野は小さく笑った。

「人間万事塞翁が馬、これから先どうにかなるわよ。サラリーマンになりたくないなら今からでも遅くないんじゃない？」

「でも、学園都市って科学者と学生の集まりだし、働き場ってあんなのかな？」

「さあ？どうなのかしら」

あっさり切り捨てた麦野は残りのスポーツドリンクを飲み干しゴミ箱へ投げる。それは放物線を描きポスト！と音を立ててゴミ箱の中に収まった。

「おいおい、自分の人生だぞ？麦野は不安にならないのか？」

「殆ど将来安泰だからかな。気にしたこともないのは確かだね」

聞けば、ふざけているのか？と聞きたくなるほどの楽観的物言いだ。が事実、彼女は学園都市が誇るLEVEL5。将来安泰と言っただけは間違いではない。だがしかし、それは学園都市が生み出した闇、そこに生きる者でなかったら話でもある。

そんな事をぼんやりと考えた麦野は目を細めた。

やっぱり、眩しいなあ。こんなちよつとした雑談なんていつ以来だる？『アイテム』のメンバーでも多分ここまでは……

その思考に至って麦野は衝撃が走った。『アイテム』の皆は信頼できる仲間だ。なのに最後の壁を破って麦野沈利と言う人間として接しなかったのに、出会って1日も経っていないこの青年にはそれをさらけ出している。

自己分析ではあるが麦野沈利は他人に触れられるのを嫌う。体ではなく心にだ。なのに自分から人間である麦野沈利を表に出す。その行為はまるで上条に人間としての自分を見て、触れて欲しいのではないだろうか？

そんなこと……

「有り得ない、わよね」

消えてしまいそうな笑みでそれを否定した。

なぜだか、そうしないと自分が消えてしまいそうな気がしたから。でも……

「おい、どうした？」

哀愁漂う空気を察したのか心配そうな上条の顔が近くにあった。

「なあんでも無いわよ。ただ、上条が眩しいなあ、なんて思っただけ」

「お、おう」

麦野の柔らかく、しっとりとした両手が上条の両頬を包む。

まるで宝物を撫でるような動きで麦野の手が上条の頬を行き来する。くすぐったくて身動きをすると麦野はゆっくりと手を離れた。

「おかしいわね。本当におかしいの。私と上条、まだ出会ってそんなに時間経ってないのよ？」

「麦野どうした？なにが悲しいんだ？」

「そんな、表情かおしてる？」

「してる。頼りないかも知れないけど、言ってくれ。そしたら力になるから」

ああ、やっぱり。

・・・私はどうやら……

「いつか言えたら言っわ」

「約束だぞ！麦野はなんだか無茶してるからな」

「なによ、それ」

『私』を誰かに見てもらいんだ。

でも、それは多分他の誰かじゃなくて、アンタなんだよ当麻。



私を化け物じゃなくて最初から最後まで人間として見てくれた当麻じゃなきゃ駄目なんだ。原子崩しをもろともしない当麻じゃなきゃできないこと。

「それじゃ、先ずは退院しよう」

「へ？」

「退院おめでとう御座います上条当麻様。今年何回目ですかね？」

「は、ははは。えっと10くらいかな？」

「記録更新しないように頑張ってくださいね？はい、どうぞ」

「はい、どうも有り難う御座います。頑張ってみますね」

保険証を受け取りソファーに座っている麦野を見つけ小走りで近寄る。

「待った？」

「ん、ちょうど公衆電話で連絡取ったとこよ。それよりアンタってよく入院するのね」

「ははは、そうなんだよ。不幸な星下に産まれてしまったがために」

「それって単にかーみじょうがトラブルに突進してるのも原因の一端よね？」

ズバツと言いつつた麦野に上条は困ったように笑った。

「でも困ってる人見捨てられるの出来ないんだよ。確かに見捨てたらこんな入院しないけど、後でその人が入院とかすると思うと体が勝手に動いてて……」

誰かを助けるために行動する揺るがない精神。誰かのために怒って笑えるこの青年の美德なんだろう。そんなものは普通に過ごしていて身に付くものじゃない。理由があるとすれば、

「ねえかーみじょう、アンタさ昔酷いこととか、どうしようもなく寂しいことってあった？」

「……………」

今まで締まりのない表情をしていた上条当麻の表情がすっぱり抜け落ち、すぐさま驚愕に彩られた。なにかを言おうとして失敗した。口が中途半端に開いて呻いたような声が、あの輝いていた青年から零れ落ちる。

それだけで理解した。麦野は上条のトラウマを掘り起こした。それを理解するには十秒も要らなかった。

「ごめん」

痛々しくて目線を合わせ辛くなり、自然と麦野の口から謝罪の言葉が出た。

あれだけ笑っていた彼が、曇らせてしまった。

「うん、こっちこそごめんな？変な空気にしてさ。初めてなんだ、多分そうやって俺の行動の根元を聞かれたの。よく……分かったな。気にしたこと無いけど多分そうなんだと思うんだ」

「寂しい夜を過ごせ過ぎるほど人に優しくなれる。そんな事を誰かに聞いてね、あとはなんとなく」

「そうか」

「行きましょう、アパートか学校まで送るわよ。やっぱり私がかみじょうを迎えに行くわ」

先導するように麦野は自動ドアを潜った。黒い車が目の前に止まっていて麦野が窓ガラスを軽く叩くと直ぐに扉が開き上条を手招きする。

「こっからは上条が先導よろしく。まずはアパートでいいの？」

「ああ、そうしてくれ」

車に乗り込むと運転手の男が怪訝そうな顔をしたが直ぐに自然を前に戻す。

「どこまでですか？」

「えつと第7学区の男子寮です」

「いっぱいあるぞ、かーみじょう」

まさに運転手の内心を代弁した麦野は流れていく風景を眺めていた。

近未来的風景は白を基本として申し訳程度に街路樹があるどこか殺風景な世界だった。

「あ、そこ左にお願いします」

でも何故だろう。今はこんな世界も捨てたもんじゃない、と麦野の中で囁いていた。

「真っ直ぐで大丈夫ですよ」

「はい」

それはこの青年のおかげなのだろうか？

## 見える風景（後書き）

後書き、と言いますか上条当麻の人間性？について

読まなくても大丈夫です

上条の人助け行動の原点って昔の自分が受けた痛みとか、境遇も理由の一つなのでは？  
と思います。

殆どは本来の性格からかも知れませんが必ずしもその性格だけが理由にしては上条当麻の行動は不自然に感じます。

しかしあの幼少期の上条当麻がその境遇をバネに今があるならば、個人的に納得できますね。

と言う感想でした

## 指先からのメッセージ（前書き）

感想やお気に入り登録ありがとうございます！御座います！

## 指先からのメッセージ

上条当麻を学校まで送り届けた麦野は『アイテム』のアジトではなく、自分の家に帰った。

浴槽に湯を張る為に、タッチパネル式の操作機器のボタンを押す。後は待つばかりだ。

昨日から立て続けに事が起き正直、精神的に疲弊している。熱いお湯に浸かって少しでもこの倦怠感をぬぐい去りたいくらいだ。

「…… 原子崩し、か」

精神の疲弊の大元の元凶だった。超能力者である事に誇りを持ち、完璧であることに意義を満たす彼女としては、やはり自身の能力である 原子崩し の成長は必要不可欠。

しかし科学者にはもう成長の兆しはないと判子を貰ったばかりだ。

「どうやったら、先に進めるかな？」

あの青年に助けてはもらったが、やはり壁は巨大で、覆しようもないものに思えて仕方ない。

逃げる事は、いつでも出来る。だがここでまた逃げたら、一生第四位のままなのは確定だ。

「それは、イヤ……」

逃げたいのに、逃げられない。激しいジレンマに麦野はソファアに倒れ込む。天井をぼんやりと眺めていると、機械的な音が鳴った。

「ん、溜まったみたいね」

適当に服を掴むと麦野は浴室に足を向けた。

麦野は分かっている。この問題を後回しにすればいつか、とんでもないしっぺ返しが来ることくらい。

「今日麦野、超来ないみたいですよ」

「珍しい。はっ！まさか恋人が出来た、とか？」

「超有り得ないですよフレнда」

だよねー、と言った本人フレндаと言う少女は笑い飛ばす。

金髪碧眼とあからさまに日本人ではない容姿の少女は携帯を弄っていた。

「……南から電波がきてる」



どこか生気の抜けたジャージ姿の少女、滝壺理後はボソツと囁いた。いつもの事なのでこの発言は基本無視していい。

「でも、いきなり病院に車寄せせ、つてのは超驚きました。……………めぼしい映画はないみたいですね」

パタンと雑誌を閉じたこのメンバーで一番幼い絹旗最愛はコーラを飲み干す。

「入院沙汰なんて麦野にしては珍しい訳よ」

「むぎのも人間。珍しくないよ」

おっとりした滝壺の言葉に絹旗とフレンドは揃って、それを否定した。

「あの麦野が？入院するような怪我しない訳よ」

「そうそう、上から四番目の人を超病院送りに出来るのは、超それ以上と同じLEVELの人間だけですよ滝壺さん」

「そうじゃなくて、むぎのは“人”なんだよ？」

滝壺が言うことには一理ある。しかしLEVEL5はそんな生易しいものじゃないのは体験済み。LEVEL4とLEVEL5の間には決して越えられない壁があるのだ。

その力がどうにも人間であること事を忘れさせる。

むしろLEVEL5は人間として扱える者なのだろうか？とフレンド

ダは心の中で呟いた。彼女の導き出した答えは、無理に近い、だった。

「アレが人間なら不公平だよな」

「…フレンド！」

思わず出てきた言葉は絹旗に咎められ、流石のフレンドもさっきの一言を悔いた。

その麦野に助けられたことは沢山あるのは事実でもあった。

「ごめん、言い過ぎた」

「…超気をつけて下さい」

それからぶつつりと途切れた会話の糸はなかなか修復できず三者三様の反応を見せた。

フレンドは昔を思い返すように目を伏せ、口元は頬杖をついて隠す。

絹旗は苦汁を舐めたような表情をして膝の上で硬く拳を握り締めた。

滝壺はどこか遠くを輝きのない瞳で見つめていた。

やはりLEVEL5に対する感情の根源には“恐怖”と言う物が多分に含まれている。それは仲間内であっても覆されるものじゃない。

そして、さらに言えば麦野は他のLEVEL5より感情の起伏が激しい。例えて言うならば、ランダムで爆発する爆弾のような存在だ。

もしくは知性のある猛獣と言ったところか。

どちらにせよ、まだ人間の範囲に収まるフレンド達には手に余る事に違いはなかった。

「……ちよつと外の空気吸ってくる。戻って来ないから」

しかしそんな彼女でも優しかったのは事実だ。それさえも、否定した自分に嫌気が差したフレンドは手短に告げるとファミレスを出た。

時間は午後四時半、六月特有の湿った風が金色の髪を靡かせた。

フレンドが出て行った後、絹旗はファミレスのソファアの上で縮こまっていた。やはり申し訳なさそうに、うなだれている。

「私……」

「うん」

重たい口を開き、それでも言い留まった絹旗に滝壺は次を促すように相槌をうった。

「私、フレンドを超咎めましたけど、私否定出来ませんでした」

なにを？なんて滝壺は聞かず静かに頷く。

「麦野はそりゃ、怖くてミス一つ超許してくれないけど、それって仕事なら当たり前前の事ですし、裏を返せばそれだけ超期待してくれていた事にもなります」

「そつだね」

「……………超不器用なのは『アイテム』のみんな分かってるのに、麦野のこと……………」

「責めないで、きぬはた」

最後まで聞いてくれた滝壺に伝えるように小さく絹旗は頷いた。そしてその手を取って二人もファミレスから出て行った。

『アイテム』のメンバーが全員ファミレスから出る約三十分前

腕時計を確かめる。時間は午後四時。少し早かっただろうか？と麦野は思ったが、下校する生徒はまばらながら居る。

それを横目で見ながらあのウニのような頭をした彼がない事に心の内嘆息を漏らす。

時間を明確に決めなかったのが仇になった結果だ。

もう少しゆっくり待つか、と壁にもたれ掛かると視線を感じ校門を

振り向く。

「……………」

さつきから好奇の視線に晒されていたが、つい今し方感じた視線はそんな野次馬じみたものではなかった。

暗部と言う世界に浸かりきった麦野には解る。素人なんか真似できないプレッシャーを叩きつけるような敵意で構成されたものだ。思わず麦野の背筋に悪寒が走るくらいに。

しかし本当にほんの一瞬程度のレベルで今では嘘のように敵意や殺気の視線は感じない。

だが、秩序の薄い弱肉強食の世界で女王に君臨する麦野の第六感は警告する。

……隙を作れば殺される

「……………チツ、どこのどいつだ」

あくまで自然体に見せながら警戒態勢を崩さない。

どこから何が飛んできてもおかしくない状況に麦野は神経を広く、鋭く尖らせた。じわじわと麦野の神経が辺り一帯を浸食する。

「おーい麦野！」

しかし彼女の行動は徒労に終わった。今まで張り巡らせた神経は、遠くから元気に手を振る上条の存在により集中力が切れ。麦野自身

なぜだか脱力した。

それは今までのシリアスな内心が上条当麻のどこか気の抜けた存在で掻き乱された事に他ならない。

「遅いかーみじょう！デートで女を待たせるのはマナー違反よ！」

「ええ、デートって！だって買い物だろ？」

「買い物だってデートよ。ホラさっさと携帯買いに行くんでしょ？」

「おい、いきなり引つ張んなよ」

上条の右腕を掴み麦野は急がすようにその場から離れようと急ぐ。

また感じるのだ。上条当麻と話し始めた時から、鋭く“背中を刺す”ような威圧感。今度は一瞬のものでなく何時までも麦野に突き刺さった。

最寄りの携帯ショップの道案内を上条に任せながら麦野はその隣を歩く。

だれかとプライベートな買い物久しぶりで内心喜んでいるのは否定出来ないが、それを表現するのはまた違う。

「携帯どんなのがいい？」

「デザインにはこだわらないから」

「ならゲコ太の携帯を買って上げる」

「いや、やっぱりデザインは大人のシックな感じがいいよな」

案を取り潰された麦野は少し不満そうな顔をしたが上条からしてみたら、冗談じゃない。クラスの笑い者だ。

そんなたわいない話をしていると人の多い通りに出た。下校時間を過ぎた街には学生がごった返している。

上条は麦野の手を握ると大きな流れに従う。

「かーみじょうって時々変に紳士よね」

「だってはぐれたら大変だろ？通信手段壊れてんだし」

「その時は空目掛けて 原子崩し を撃つわよ」

「分かりやすいけど、ごめん止めて下さい」

なんだか簡単に想像出来て怖い。

「ならばぐれないようにしないとね。かーみじょう手じゃなくて腕かしなさい」

「な、なんだよ」

「減るもんじゃないしさつさとする」

急かす麦野に上条は手を離した。すると麦野はすぐにその腕に抱きつく。

「これで大丈夫ね」

「いや、いやいやいや上条さん大丈夫じゃないから?! 麦野さん当たってます!」

「当たてんのよ」

むにゅ、と効果音がするくらい麦野の豊満な胸が上条の二の腕にこれでもかと言つほど押し当てられる。

上条当麻も健全な男子高校生。グラビア雑誌などに鼻息荒くなる年頃には、このダイレクトに当たる感触はまさに天国のような拷問だったりする。

「免疫ないの?」

「免疫どうここの前に今の時期、男は皆狼です!」

「いやあ、本当に弄りがいのある奴だわ」

「麦野のドSうううう!」

本人達曰わく、「じゃれ合い」の行動は周囲からはただイチャついているように見えるだけで、そして二人からすれば周りの人間なんて居ないに等しく、向けられる視線などどこ吹く風だ。

そして主に麦野に向けられた視線に二人は気付かなかった。

「む、麦野が……男と歩いてる! しかも仲睦まじく! ……あ、



ああ有り得ない訳よ！」

地獄を目の当たりにし、絶望に支配されたような声音は暗部組織『アイテム』のメンバー、フレンドから絞り出されていた。

貧血症状のようにフラつくが倒れる事を踏みとどまり、来た道を全力で走り出した。

「うわあああああ！私の麦野が、私の麦野が！！」

一応、麦野の名誉の為だが彼女はフレンドのものではない。そして同性を愛してる訳でもない。つまりこれはフレンドの妄言である。

「ん？」

「麦野離してくれる気になったか？」

「違う。今、なーんか聞こえた気がしたのよね」

どさくさに紛れて離してもらった作戦は失敗に終わり上条は携帯ショップまで天国であり地獄を味わった結果になった。

一方その頃フレンドは

「滝壺聞いてほしい訳よ!」

「どうしたのフレнда?」

「あのね麦野が男と仲良く歩いてた訳よ!私の麦野がああ……………」

携帯越しに滝壺に泣きつくフレндаは今も表通りを全力疾走中。

「むぎのが?デートしてたの?」

「デート?!」

「あー、だから麦野今日は超来ないって言ったんですね」

もう一つの声は絹旗だった。

「……………むぎの今日の朝、病院に行ったんだよね?」

「……………滝壺さん、まさか、そんなこと」

「え?」

フレндаも足を止め会話に集中する。数秒の沈黙の後、フレндаが弾き出した答えは……………

「……………妊娠、だなんてない、よね?」

「……………」

「……………」

滝壺も絹旗も返答をしてくれなかった。

「え、なんで黙る訳なのよ？」

「お祝い、何がいいかな？」

滝壺の言葉が壮大な勘違いの幕開けになった。

なにやら『アイテム』のメンバーがとんでもない勘違いをしているとは露知らず、麦野と上条は携帯を選んでいた。

「うーん、どれにしようかな？」

「そう？なら私が上条の、上条が私のを選ぶ？」

「いいのか？俺なんか麦野の携帯選んじまって」

上条の不安を押しつけ麦野は男性が選ぶそうなデザインの携帯探し始めた。

「うん、いいわよ。その代わり、しっかり考えてね」

「プレゼント選びみたいで緊張するな」

「携帯だからね。……これなんてどう？」

麦野が手渡したのは薄型でシンプルな黒のボディ。側面部分には細く赤のラインが引かれていた。

派手すぎない色でありながら地味と言うわけでもなく、そして持ちやすさに上条も気に入った。

「へえ、俺が好きそうなデザインよく分かったな」

「シックなのが良いつて言ってたじゃない」

「あ……」

あのじゃれ合いで忘れていたが確かにそんな事を言った。

それをきちんと覚えてくれて真剣にどれがいいか吟味したのだろう。なら自分も真剣に選んでやらないと、そう思い麦野の服装を観察してみる。

ジャージーワンピースの胸元のスリープですっきりとした美のシルエット。腕には二段フリルが付き、しなやかな生地素材が波打つようなデザインの服に滑らかな影をつくる。スカート部分にたっぷりタッグをあしらいつエミニンな印象をした麦野。

「なによ人を凝視して」

「うん、やっぱり麦野は美人だな」

「いきなり言うわね」

「服装とかに合わせようかと思って観察してたんだけどさ」

「視姦になったと」

「違う！断じて違うぞ麦野！」

心臓に悪い一言をさらっと言いつ放つ彼女に上条はどっと疲れた。

「でもこの服だけに合わせるつもり？」

その場で麦野が回ってみせる。ふわりと舞った栗色の髪が綺麗だと上条は思った。

「いや、参考にするだけだ。んで結果、この携帯はどうだ？」

「へえピンクか」

薄い控え目な発色具合だが、淡い感じは嫌いではない麦野はデザイン共に気に入った。

「ありがとね。じゃ契約しますか」

「ボクと契約して魔法少女になってよ！」

「キモい、裏声すんな。ついでにそんな歳じゃない。あれ中学生くらいでしょっ」

「お、よくこのネタ分かったな」

「いや、アンタが見てることが意外だわ」

「友人の勧めで見た」

「私も似た感じね。ま、私が主人公達くらい年齢で契約したら間違いない魔女になったわね」

そんな頃だったか、学園都市の闇に捕まり社会に失望と絶望を覚えたのわ。そんな時だったか、自分の内に獰猛で殺戮に貪欲な化け物を飼い始めたのは……

「……い、おい！麦野どうした？」

「え、うん。なんでもない」

いつから考え込んでいたのだろう。上条が心配そうな顔をしていた。

「大丈夫よ、それより契約契約！」

「……無茶すんなよ」

麦野は思わず苦笑した。

まったく、鋭いのか鈍いのか分かったもんじゃないわ。

おそらく、彼は人の痛みが解るぶん、人の心が理解できたりするのだろう。

「してないしてない。店員さん、契約お願いしますね」

「でしたら此方の書類に必要な事を」

この手の事に慣れていている麦野は受け取ると素早く書類に書き記した。

「はい、これでいい？」

「では、四桁のパスワードを決めて下さい」

「そうね、……これでいいか」

「こつちも出来たぞ」

上条も書類に書き込みを終えパスワードを適当に決めると、店員は受け取りパソコンに素早く情報を入力する。

「期間限定のカップル契約ですか？」

「はい」

「でしたら少しお安くなりますよ。自動的にメールアドレスや誕生日と言った個人情報相手が相手の携帯に登録される仕様になります。問題の方は御座いませつか？」

「問題はないよな麦野？」

「うーん、そうね」

「お支払方法などは？」

「それなら一括払いで」

「カードと現金どちらになりますか？」

麦野は昨日とは違う財布を取り出すと中身を確認する。

「現金でお願いします」

「畏まりました」

指定された金額を払うと麦野は情報登録が終わった携帯の入った袋を手を取った。上条もそれを取ると店員にお礼を言ってから店を出る。

「ありがとな本当に金まで払ってもらって」

「もとより壊れた原因は私なんだから気にしないの」

腕時計を確認する。時間は午後五時半手前。まだ明るい空を見ながら麦野は歩き出した。

「目的も終わったし、またね上条」

「もう行くのか？なんか食ってこつぜ」

「そうしたいんだけど、用事があるから待たねー」

そう言うと麦野は手を振ったがどうにも煮え切らない上条の表情に麦野は首を傾げた。



「どうしたのよ？」

「うーん、なんでもないまたな」

帰宅していく上条の背中を見つめながら麦野はため息をついた。

人間でいる今の自分でもこの世界は息苦しい。人として幸せを噛み締めると同時に人である良心が人殺しである自分の幸せを拒絶している。

「携帯起動させるか」

僅かな現実逃避のために箱に入った携帯を起動させた。

瞬間、それを待ち望んでいたように着信音があった。

「……………もしもし」

「こいつって奴はー、携帯替えたなら連絡しなさいよね。まあ良いけど」

「あばよ」

「ああああ、待って待ってよ！仕事があるんだって」

やけに高く響く声に麦野は眉間に皺を寄せた。

「うるせえ、ならさっさと要件を言いやがれ」

「まったくこいつって奴はー、最近能力者が暴れすぎてんの。あん

たにとつちやゴミみたいなもんだけど。調子こいてなにやら闇に手を染めた奴らの集まり叩いてほしいって」

「内容理解した。後はメールを送れ。今度こそあばよ」

なにか言ったが気にしない。問答無用で電話を切ると、センターにメールがきていた。

「……上条、当麻」

メールを送ってきたのはさっき別れたばかりの彼だった。

“また、会えるよな？会うなら今度俺が迎えに行くよ”

「あいつ、なんで」

こんなタイミングで……

暗部としての自分ならここで、誰が会つか馬鹿野郎。くらい送れたはずなのに、

指先が記した答えは

“そうね。でも二、三日は無理みたい。誘ってくれてありがとう”

送信。

ああ、心と身体がちぐはぐだ。心は会うことなんて望んでないのに。身体は言うことをきかない。

指先からのメッセージ。それはたぶん本心。

規則的な機械音が鳴り響く。仕事のメールだ。

「さあて、今回は誰が死ぬのかな？」

## 『アイテム』 始動

上条当麻は麦野沈利と別れた後、言いようのない不安に胸を締め付けられた。

その理由は、初めて会ったときも、病院でも、さっきの携帯ショッブだって、彼女はどこか遠くを眺めている事があった。

風景を見ているんじゃない。『昔』を視ているんだ。

上条にはそれが直ぐに分かった。

なにが悲しくて、なにが辛くて、あんな表情をするんだらう？

きっとそこには自分がまだ触れることの出来ない麦野沈利の心の闇がある。

救ってやれないだらうか。せめて病院で見せてくれた屈託のない自然な微笑みができるような女の子にしたい。

気が付けば携帯を起動させ、唯一ある麦野のメールアドレスに文章を打っていた。

“また、会えるよな？会えるなら今度俺が迎えに行くよ”

彼女の闇を知るには、彼女を知らなければならぬ。道のりは長いがきつと麦野のメンタルは繊細だ。ゆっくり触れていかないと

「麦野おおおお!!」

「なによフレンド。泣きながら抱きついてんじゃねえ」

しかしフレンドは離れず「だって、だってえ!」としゃくり上げてさらに抱擁に力を込める。

その様子に麦野は小さく嘆息をした。

『アイテム』のアジトに帰って来たら早速これだ。理由は知らないが、どうせ絹旗と喧嘩して負けたんだろ。そう結論付けると麦野はフレンドの頭を鷲掴みにし、力業で引き剥がす。

「まったく、いい加減にしろ。今夜十時から仕事入ったんだから、準備するわよ」

「そんな事より!」

作戦会議するために一番広い部屋に行こうとしたら今度は後ろから抱きつかれた。

「フレンド……そんなにミンチになりてえか!」

「麦野大丈夫なの？結局、病院行ってどうしちゃった訳よ！身体は  
だるかったりとかする？」

物凄い迫力で、なんだか責め立てられている気分だが、それだけフ  
レンドが自分を心配してくれていた事が麦野の怒りを鎮めた。

「うん。……大丈夫よ。だからアンタも離しなさい」

「……そう、だね。あんまり圧迫したら駄目だもん」

なぜ圧迫なのか気になったが收拾がなつかないだろうと思いい無視し  
た。

そしてリビングのドアを開くと、どこか元気のない絹旗といつもの  
滝壺がいた。

「あ、お帰りなさい麦野。その、身体とか超大丈夫ですか？」

「なによ、絹旗までフレンドみたいな事言っつて。大丈夫、仕事には  
支障はないから」

「そのことなんだけど、むぎの」

滝壺はいつもと変わらないおっとりとした口調で告げる。

「今日の仕事、私達だけでやるからむぎのは休んでて。あとお酒の  
んじゃ駄目だよ」

「仕事に支障は無いつてば。それに私からなんで酒を取り上げるの  
？」

それに答えたのは滝壺ではなくて、どうしたらいいか分からない、そんな顔をした絹旗だった。

「ほら、いくらまだ大丈夫だからって後が超辛くてなりますし、お酒なんて本当なら超飲んじや駄目なんですから我慢して下さい」

「いや、医者だってもう大丈夫って言ったんだから大丈夫よ。酒くらい飲んだっていいじゃない」

「駄目です。超駄目なんです」

「それと、むぎのおめでとう」

「はい、ありがとう滝壺。でなにが、おめでたいの」

今日は自分の誕生日だっけ？と思ったが全然違う。それに何だか話が噛み合っていない。

絹旗とフレンドは言いにくそうにモゴモゴしていたが、滝壺は違った。

「妊娠おめでとむぎの」

「妊娠ね、ありが……ん？」

怪訝な表情になる麦野にフレンドは恐る恐ると言った感じて尋ねた。

「結局、何ヶ月になった訳よ？」

「はあ？いやいや、ちょっと待て。なんで妊娠の話になってる、しかも私が！？」

「そんなに超恥ずかしくなくてもいいんですよ麦野」

「違う！違うから！！」

必死に弁解する麦野に三人は優しい瞳で見つめた。

「病院から男と一緒に出てくるし、街中でイチャイチャとデート。麦野はその男にゾッコンな訳よ」

「大丈夫です。麦野が居なくても私達、超頑張りますから」

「だからゆっくり休んでね」

「テメエ等、そこに正座しろおおオオオオオオ！！！！」

麦野の怒声が学園都市の闇に響き、少女達の絶叫がかき消された。

そして、なぜそんな勘違いを生んだのか聞くと麦野は、入院理由も伝えなかったし、なにより上条と病院から出てきた事が元の原因だと分かり一方的な責めに入れなくなつた。

「あー、勘違いさせた事は謝る。ごめん。でもよ、私だって暗部の人間だし、しかもリーダー。ちゃんと弁えてるつもりなんだけど」

「でも結局、麦野も一人の女の子な訳」

フレンドの最後の一言が切れた。それは麦野が無言で放つた 原子



崩しの一撃が頬を掠めたからだ。

「フーレンダア」

「……何も言ってますん」

ニコニコ笑顔な麦野と違いフレンドは青ざめてガクガクと震えが止まらなかった。

「ならむぎのは妊娠してないんだね？」

「してないわよ。もうその話し掘り起こすな」

「はい、プレゼント」

滝壺は麦野の手に紙でできた箱を置いた。それを見て硬直する麦野と、やっぱりいつも通りな滝壺。

絹旗が不思議そうな視線を麦野に向ける。しかし麦野はそれに気付かず、恐る恐る尋ねた。頼むから違うと言ってくれ！と言ったような気迫も交えて。

「滝壺さん、コレは一体なんでしょう？」

ついでに言うなら、麦野が絶対にしない丁寧な口調で。

「なにしてコンドームむう！」

「滝壺おお！信じてたんだよ、アンタがよく分からないって言うてくれるってさあー！」

「ねえ、フレンド。滝壺さんが麦野に渡したやつって超何ですか？」

「……………ワタシ、ヨクワカラナイ」

「むー、本当は超知ってるでしょう！」

自分一人蚊帳の外で疎外感を感じた絹旗は頬を膨らませたが、フレンドにはそれが純粹無垢に見えて癒される。

「絹旗はずっとそのまま置いてほしい訳よ」

「なんでそんな遠い目してるんですか？」

フレンドはその問いに答えず、滝壺の両肩を掴み激しく前後に揺らす麦野を見つめた。

「でもむぎの、それがあるのと無いのでは大きく違うんだよ」

「分かってんだよオオオオオオオ！でも滝壺がこんなの持ってるの駄目！その役目はせめてフレンドだろうが！！」

「麦野おおおお？！麦野の中の私ってどんな位置付け！？」

「超置いてきぼりにしないで下さいーい！」

滝壺の落とした爆弾の影響で收拾がつかなくなり『アイテム』始まって以来の大混乱が巻き起こった。

ピリリッ！

しかしそれはリーダーである麦野の携帯が鳴った事により今までの喧騒が嘘のようにその場は水を打った。

さっきまでとは違う表情の麦野は直ぐに携帯を開きメールを確認する。あつと言つ間に目を通すと椅子から立ち上がった。

「行くわよ、絹旗下つ端に連絡お願い」

「はい」

それは『アイテム』始動の合図であり、闇に生きる彼女達の一面を知る瞬間となる。

そして、

「今回は能力者の集まりだけど、気にせず殲滅しろだとさ」

「それだけ価値のない奴らって訳よ」

傲慢の武器を片手にフレンドは外へと繋がる扉を押し開ける。

学園都市で光の届かぬ闇が口を開いて待っていた。

「目的地に居る奴等は……」

ついに麦野の中に巣くう闇と化け物が鎌首を持ち上げた。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね！」

のんびりとした時間だった。そう、“だった”のだ。

「待てえええ！戦えって言ってるのッ！！！」

「ダアアア！なんでビリビリが居るんだよ！！！」

「ビリビリ言うな！！！」

「ならピ チュウだ！！！」

「ああ！何だつて！？！」

雷撃が上条の左頭部掠め、チリチリとした音と髪の毛を燃やした特有の臭いがする。

「テメエ！当たったらどーすんだ！！！」

「なら戦え！！！」

「不幸だあああああ！！！」

街に少年の絶叫が響く。

確かに学園都市、能力者なんか珍しくないこの世界でも道のど真ん中で能力者を使うのは珍しいようだ。

学生達はぎょっとしたように道の隅に移動していく。

「俺は今日退院したばかりなんだぞ！」

「えっ！？そうだったの………ってそんな手に乗るか！アンタ昨日平気で逃げたじゃない！」

昨日、上条当麻は麦野沈利と出会う前に御坂美琴と出会っていたのだ。もちろんその後は今のように全力鬼ごっこになった訳だが。

「ビリビリは門限とかあんだろ！」

「なんとかなるわよ！」

因みにこの場合、“なんとかなる”ではなく“なんとかする”の間違いだったりする。だがしかし“なんともならない”の可能性が九割。

御坂御坂が門限破って厳しい罰則を喰らうのは決まった。

故に彼女も自棄やけを起こしている。

「アンタが戦わないと私だけ痛い思いするでしょう！」

「なら帰れ！」

上条は体力に物を言わせ逃げ切ろうかと思ったが、どうにも彼女も体力があるらしく引き離せない。

「クソッ！」

上条は素早く裏路地に入り御坂の視界から逃れようとした。

細く人が二人も並んで入れないような道には障害物はなく、真っ直ぐ突き抜けるとまだ裏路地の迷路が広がっていた。ちょうどTの字になったさつきよりも格段に道幅のある場合だった。

「待てやゴラアアア！」

コンクリートの壁に反響して御坂の怒号が響く。反射的に上条は左に曲がったが、行き止まりになっていた。

「やべえ、どうする」

流石に上条でも壁を登ることなんて出来ない。

御坂の声が大きくなるなか上条はたまたま、道の端にある物が目に付いた。

「そこか！」

御坂は壁に向かって電撃を放とうとして、踏みとどまった。

「あれ？こつちじゃない？」

しかし上条は居らず勢いを挫かれた御坂は辺りを見渡す。あるのは道の端ある木で出来た箱が積み上げられているくらいだった。

そしてその箱の中から上条は、早くどっか行け！と願っている。

「行き止まりだし、反対方向か！」

それに応えるように御坂は右へと駆け出した。

それにホツとした。しかし念の為に上条は五分くらい箱の中で息を殺す。

それがこれからの人生を左右するとは知らずに。

もう、いいか？

上条は蓋を開けようとするすると数人の話し声が聞こえた。

「これが取引のブツですか？」

「ああ、中身は見んなよ。あくまで俺らは運搬だ。見るんなら死ぬ覚悟で見ろよ」

「まさに冥土の土産ってか？笑えねえぜ」

「早く運ぶぞ」

声は四人だが足音はそれ以上。上条はさらに息を殺した。話を聞いている限りでは見つければ蜂の巣だ。生きて帰れる保証はない。

「……よつと」

え！？えええ！

急に上条が入った木箱が持ち上げられた。

「よし車に詰め込め」

「全部入るんですか？」

「二台あるから心配すんな。それより急がねーと依頼人と鉢合わせだ」

「まずいんですか？」

「顔を見ない、指定時間までにブツを置く。それが俺らのミッションだ」

短く告げるとリーダー核の男は時計を確認した。

「まだ時間あるな」

「こっちの車積み終わったぞ」



「それじゃそつちは行きますか。場所は副リーダーのテメエも知ってんだろ？」

「了解した。後から行く」

それを確認し上条が入った木箱のある車は発進した。

かつて無い事件に巻き込まれることとなった上条当麻はあまりの事に魂が抜けていた。

不幸だ、とさへ呟くことのできない状況。

そして車は学園都市からも見放された、第19学区へと走り出す。

そこに暗部最強の女王クイーンがいると知らずに。

運命は廻り出す。歯車は勢いを止めるところか加速する。

そして始まる事のない物語が今、始まった。

『アイテム』始動（後書き）

次からのお礼文とかあとがきに書きますね。

なんだかその方が見やすいと思うので

入場者3000人突破！！

皆さん、有り難う御座います！

## 原子崩し

長い間、車に揺られどこに来たかさへ分らない。

ただ時間からすると、第7学区の外に違いない。

そのくらい長い時間、同じ様な姿勢を保ってきた上条は限界だった。腰に痛みが走り、うまく姿勢を変えられない。そして何より、この木箱は上条が体操座りをして上半身を前に倒さないと入らないサイズで、狭すぎて動きようもない。

いい加減限界が来たが車が止まった。赤信号だからと言うわけではないようだ。エンジンまで完全に停止して、人が降りてくる気配がする。

「アイツ等もあと10分もすれば着くみたいだ。早く荷物運べ」

「リーダーも運んで下さいよ」

「リーダーだからいいの」

なんだか馬鹿らしい会話に上条は気が抜けたが、持ち上げられる感覚に身を硬くした。

そこまで長く移動した訳ではなく平らな地面に下ろされた。

それから20分はその作業が続き荷物を運び終えた集団はぞろぞろ

と車に向かう。

今回の仕事はどうだとか、今日はもう寝るとか、プライベートなものばかりで上条の緊張の糸も少し緩んだ。

そして無音になった時、上条は音を出さないように箱から外に出て、律儀に蓋を閉める。

「どこだここ？」

月の光で辛うじて見えたのは、駐車場のような広く柱の少ない空間。そして余りにボロボロな建物だということ。

廃屋と言う表現しか出てこない。

物陰に隠れるように移動していると、上条は壁になにやらテープのようなものが貼ってあるのに気づいた。

「なんだコレ？」

一見、修正テープだが手触りがなんだか違う。それに真新しい。何かの暗号だろうか？

そんな事を考えていると、背筋が凍るような悲鳴と絶叫が上条の耳まで殴り込んできた。

「アガアアア、ギイヤアアアアアアアアア！」

「ひいいい！！あ……あああ！！！！」

「グガアアアアア！ヒギイツ！」

断末魔の叫び声はいきなり途絶え、駐車場の外で激しい閃光が瞬いた。

続いてバタバタと足音が駐車場に雪崩れ込み、何人かの男達は恐怖でもつれる足を懸命に引っ張って走ってきていた。

皆一様に恐怖で顔が強張り、気の弱い奴は既に涙で顔が酷いことになっている。

上条は訳が分からなくなり足が全く動かなくなった。

さっきの断末魔はどうした？なんでこいつらこんなに、死に物狂いなんだよ？

現実味を帯びない光景は上条から行動力を削ぎ落とし、呆然とさせた。

「あはははははは！」

よく響く声に全身の毛が逆立った。一瞬で口の中が干上がりべた付いた舌が動かない。

瞬きさへ忘れて、上条は漆黒の闇を凝視した。響く足音。それは、じわりじわりと恐怖を伴い近づいてきた。

「あ……あ……ああ」

誰かが絶望の訪れに声を震わせる。

「ハロー、狩られるだけの家畜野郎！」

深淵の底より出てきたのは、一人の化け物だった。

月明かりに照らされた美しい顔は、命を狩る事に飢えた獅子のように牙を剥き出し歪み。その瞳は狂気に満ちていた。

「さあて、あの荷物を誰に渡そうとしたのか、言ってもらおうか？ それともジュージュー焼いてグリルパーティーにでもする？」

光の玉が女の顔をはつきり照らした。

その光景は上条まで届き、今まで動かなかった口が静かに音を零した。

「…む、ぎの……？」

「どっちでもいいか、一人残りや十分だアツ！」

光の一線が二人の男を貫く。悲鳴を上げる暇なく絶命した。

なにが起きたのか分からない。殺された本人達など、なおのこと分からなかっただろう。

彼女がやった行動は、なにもない。ただ点在する光が高速で二人の上半身を奪い去った。

ドシャツ！と重たい音を立てて崩れ落ちた死体はビクビクと痙攣しながら鮮血をコンクリートに流す。

唐突すぎて脳が一時的に真っ白になった。あまりに無残な死に様を見て、怖いだとかそんな感情は浮かんで来ない。

呼吸さへ忘れた空間に絶叫が轟いた。

「うわあああああッ！！あああ………イヤダアアアアアッ！！」

耳をつんざく絶叫に上条は震え上がり、止まった呼吸が帰ってきたと同時に物陰から飛び出した。

「麦野オオオオオ！！！」

「っ！」

麦野は突然の上条の奇襲に身を強ばられたが、暗部女王の貫禄が原子崩しの盾を展開する。

しかし、

硝子を砕いたような歪な音と共に消え去り、上条の右の拳が麦野の腹部にめり込む。

「ぐあッ！」

彼女はよろめくと、呆然と上条を見た。最後の希望が打ち砕かれたような表情で、瞳は大きく揺れ、今にも崩れそうだった。

しかし上条にはそれについて深く考査をしている隙はない。生き残った五人を見ることがなく上条は怒鳴った。

「早く逃げるッ!!」

上条の登場に度肝を抜かれ、またもや固まっていた者達は今度こそ蜘蛛の子散らすように逃げる。

だが出口に小柄な人影が立っていた。

「標的見つけた訳よ！」

場違いな明るい声をした女の子が壁を何かで引っかくと、そこから一直線に壁が爆散する。

今度は悲鳴を上げることは出来ただろうが、膨大な音の波で彼等の最期の声は聞こえなかった。

「麦野どうしたの？」

微動だにしない麦野の後ろ姿にフレンドダはゆっくり近づく。フレンドダはまだ上条に気づいていないようだ。

「そっかよ……」

低く唸るような声にフレンドダは歩みを止めた。

失望と虚無。それがぐちゃぐちゃに入り混じった声は闇に向かって吐き出されていた。

「そっという事かよッ！上条オオオオオオオオ!!!」



大気全体を震わせた激昂の叫びは、憤怒や絶望に染まったものだった。

フレンドはその麦野の声だけで泣き出しそうになる。理性の壁をぶち破って出てきた猛獣は闇の中に突進した。

「グアッ！」

肉を打つ音とまだ若い男の苦痛に呻く声が広い空間に響く。

続いて 原子崩し の閃光が闇を雑払う。そしてフレンドが視認したのはウニ頭の青年だった。

青年は右手一本で 原子崩し を粉碎する。

「麦野オ！なんでお前が人殺しをしてんだ！！」

「はぁ？お前なんかに言われる筋合いはないわよ。こっち側の人間の奴がアッ！！」

麦野はそう解釈した。

上条当麻がここに理由を、

麦野はそう誤解した。

上条当麻が何故、自分に楯突くのかを

「考えれば簡単だったじゃない。そんなチート野郎が“表”の人間やってける訳ないわよね！私がそうだったんだから！学園都市の“

闇”が見逃す事なんて、あるわけない!!」

電子の極光が六本、麦野の怒鳴り声と共に一帯を焼き払う。床や壁のコンクリートがドロドロに融解してオレンジ色に鈍く発光する。

闇が不気味に明るくなった。

「麦野がなに言ってるのかよく分からねえが、こんな事してよくないだろ！」

上条のこれ以上無いほどの真剣な怒気を含んだ言葉に動じず麦野は笑い、嗤った。

「あつははは！馬っ鹿かテメエわよ！」

上条は麦野が 原子崩し を撃つ前に直進した。

しかし麦野は電子の壁を形成する訳でもなく、極光の一撃を自分の足元近くを砕いた。それはコンクリートの破片を打ち上げ、散らばし上条を迎撃する。

間一髪で転がると、立て続けに 原子崩し が上条に直進、しかし右手で消すと麦野は居なかった。

立ち上がるうとした上条は無理やり床に押しつけられた。

「うおッ！」

ズン！と背中に衝撃が走り、主に腹部が圧迫されてうまく呼吸ができない。

そして、虫の羽ばたきの音に似ているが、それよりも重く、低い音が上条の耳に聞こえた。

「クソ！」

「ねえかーみじょお、選ばせてやるよ。黒こげのミイラがいいか、それとも、あっちこっち穴だらけがいいか。どーする？」

眩しい光の玉が麦野の周りに点在する。

上条を踏みつけた麦野は狩りを楽しむように口元に残忍な笑みを刻む。最期を選ぶ権利の譲渡は相手が命乞いをするのを誘発するため。

その細く糸のような希望に縋る人間を突き落とすのは最高の悦楽、快楽だ。

命乞いをするか泣き叫ぶか、または両方が。

“闇”に巣くい、命を食い散らかすもう一人の麦野が上条から、そのいずれかの言葉を今か今かと待ち望む。

そして上条は、

「俺は……」

震えた声に麦野はさらに笑みを深くした。

「どっちも選ばない……」

「ああ！」

一瞬の隙をついて上条は右手で麦野の足を掴むと方向関係なく強引に引っ張った。バランスを崩し派手に転倒した麦野に上条は掴みかかった。

今まで圧倒的有利にいた麦野だったが、一気に逆転されフレンドは彼女を助けるために武器を取り出した。

「フレンドア！これは私の獲物だ、手え出したらお前を上下左右に引き裂くぞオツ！！！」

だが、麦野に怒鳴られフレンドは踏みとどまる。

「でも、麦野！」

上条の右の拳が振り下ろされ、麦野はそれを掴み押し返そうとする。上条からしたら左側はまったくその逆で膠着状態だった。

しかし構わず麦野は叫んだ。

「さっさと絹旗の処にでも行け！いいか、邪魔したらテメエらもブチ殺しだ！」

「……………分かった訳よ」

苦渋の選択の末、フレンドは麦野に従い出口に向かって走り出した。

その背中が見えなくなったのを確認すると上条はさらに力を込める。

「なんでだよ！なんでなんだよ！どうして麦野が」

「いつまで“表”を気取ってた、アア！」

「“表”だとか“裏”だとか知らねえ。でも、こんな事はやっっちゃいけねえんだ！」

殴られる覚悟で左手の拘束を解き、利き手でない拳で麦野を殴った。

それは軌道を外し麦野の右の肩口に入った。

「アガツ……くう！」

脚を振り上げ麦野は上条を蹴り飛ばすと、距離を取るように転がり小刻みに痙攣を繰り返す右腕を忌々しそうに見つめて。

「麦野、お前は間違ってる！人を殺してなんになるんだ！」

その言葉で麦野の中に存在する“何か”が解き放たれた。

「間違ってる？間違ってるのはどっちだアア！私が“間違い”ならこのクソツたれな世界はなんだ、学園都市の暗部を舐めてんじやねえよ、無能力者の分際で！なら否定してみろ！“化け物”利用するだけ利用するシステムとその真っ黒な社会をなアアアアアアアアアア！！！」

麦野はなんの躊躇いもなくポケットからカードのような物を多数空中にはら蒔く。

それが何を意味するかは分からないが、上条の本能が“全力で逃げ

る！”と叫んだ。

身体はその通りに出口に向かって駆け出した。

「終わりだよオオツ！！！」

今までにない圧倒的な光が無差別に世界を薙払い、焼き尽くし粉碎した。

真っ白になった視界、全てが奪われていく感覚。

そして、

建物自体が崩壊を始めた。

壮絶な轟音と土煙が第19学区の一角で巻き起こる。その絶望的な光景に絹旗やフレンドは言葉を失った。

体晶の影響で疲弊した滝壺は、完全倒壊した建物から麦野のAIMが消えていない事を感じると、頬を少し緩めた。だが、油断出来ない。生き埋めになっているかもしれないのだ。

「大丈夫、まだむぎののAIM拡散力場は消えてない。助けに行こう」

「滝壺さんは超休んでください！フレンドは滝壺さんをお願いします。私なら瓦礫くらい超持ち上げられますから！」

絹旗が一人で崩壊した廃ビルに向かおうとすると、フレンドがそれを止めた。

「それなら滝壺を連れて行くべきだと思う。結局、そっちの方が麦野の場所とか正確に分かる訳よ」

「そうですね……」

「大丈夫だよきぬばた。それよりむぎのが心配。なんだかさっきからむぎののAIM拡散力場がおかしい」

その言葉に絹旗は少し離れた崩壊した廃ビルを見つめた。

瞬間、一筋の極光が夜空に消えていった。

それは 原子崩し の光で、麦野が生きている事を示している筈なのに、皆は素直に喜べなかった。

不安だけが胸の内に溜まる。そしてその不安は的中する。

「アッハハハハ！あはははは！！間違ってる？私が、私が間違いな の！？ククク、ふふ、あは、アハハハ！！！」

彼女の自我がゆっくりと融解を始めた。

“化け物”だとか暗部女王だとか、人間でいた筈の麦野沈利がすべて境目が溶けてぐちゃぐちゃになっていく。

「殺した、殺した、殺した殺した殺した殺した！」

最初の怯えたような声から徐々に猟奇的響きを孕ませ、狂った哄笑が続いた。

痛々しく融解していく彼女は、ピタリと全ての行動を止めると、後ろを振り向く。

そこには、あちらこちらから血を流しそれでも立ち上がった上条当麻の姿があった。

震える足に力を込め、一步の距離を確実に縮めると、そっと手を差し出した。

「迎えに来たぞ、麦野」

優しく微笑みかけてくれる彼に、麦野は泣き出しそうになった。

それは、暗部の自分なのか、化け物の自分なのか、人間である自分なのか、分からない。

ただ、嬉しかったのかもしれない。

「要らないんだよ」

でも、もう区別がつかなくなった麦野はその手を振り払った。

「なら、お前が手を取るまで俺は諦めない!」

彼は変わらず手を差し伸べてくれた



原子崩し（後書き）

入場者総数

五千人突破！

感想やお気に入り登録有り難う御座います！

眠い……、頑張りすぎたみたいだ。

## 幻想殺し

「っー！」

真っ白な光に薙払われた上条は一時的に意識を失い、今漸く目を覚ました。

しかし起き上がろうとすると全身に痛みが走り身体が思うように動かない。ひどくゆっくりな動作になってしまう。

「は、はは。すげえ、不幸なのか幸運なのか分かんねえや……」

仰向けになって上条が見た光景は、いろんな瓦礫がお互いを支え合うようにして、倒壊をギリギリ避けていた奇跡の賜物だった。

しかし身体には無数の傷が刻まれていた。特に左肩辺りは 原子崩しの一撃が掠ったらしく、肉が少し削れている。

上条は一通り、身体が動くのを確認すると、立ち上がった。それだけで肉体が悲鳴を上げる。

「……クソ、早く麦野を捜さないと」

覚束無い足取りで上へ登れそうな所を探すが、今の身体では正直無理だ。

全てが限界に到達している上条は膝を付く。そしてズボンのポケットの固い感触に気づき取り出す。

それは、麦野が上条の為に選んで、買ってくれた携帯だった。

「あつ、さっきので壊れてないだろな？」

急いで開くと携帯の画面からは光が発せられた。

「メールが来てる？」

御坂美琴に追いかけて回された時に届いたのだろう。気づかなかった。  
メールの主は

「……麦野、沈利」

思わず声に出してしまった。

そつだ、あの時まで会話をしていたじゃないか。普通のありふれた  
日常の会話。

それが急に恋しくなり、上条は唇を噛み締めた。恐らくこの大騒動  
に巻き込まれて三時間も経ってない。なのに、こんなにもあの時間  
が大切な物に感じられる。

その時、上条は唐突に考えた。

なら麦野沈利はどうだろう？彼女の言動からして、この非日常が当  
たり前になったのは昨日今日の話じゃない。もっと昔だ。

だとすれば、麦野にとって“平凡な会話”だけでもそれはとても幸  
福な事で、その話し相手は恐らく上条当麻ただ一人なのだろうと、  
鈍感な上条でも分かった。

メールを開く。

そこには

“そうね。でも二、三日は無理みたい。誘ってくれてありがとう”

その文面を見て上条は泣き出さなくなった。こんなにも普通の女の子なのに、こんなにも社会の“闇”に染まらなければならぬのか？

今まで麦野が浮かべた、寂しそうで、どこか諦めた表情をした彼女が上条の脳裏を過ぎった。

助けよう、迎えに行こう。あんな表情をさせないために。

今は社会の“闇”なんて知ったことか。今、大切なのはそれに絶望し苦しんでいる彼女を救うことだ。

上条は携帯を仕舞うと立ち上がった。最初の時のように身体を動かすだけで痛みが走る事はない。あまり痛みに脳が痛覚を遮断しているのかは分からないが、今はそれが有り難い。

「でも、やっぱり道が無いんだよな」

見渡せどそこは限られた空間。狭いそこには瓦礫の間から零れる月光が静かに上条を照らすだけだった。本来ならこんな時は無駄に動かず救助待ちである。

だが状況はそうも言っていられない。上条と同じように彼女がこの奇跡的な空間に居るとは限らない。重い瓦礫のしたに居たならば、

事態は一刻を争う。

だが杞憂に終わった。

轟音を轟かせ、全てを貫く破壊の極光が上条の背後の瓦礫を蒸発させる。慌てて振り返ると、麦野が狂った哄笑を上げていた。

上条はゆっくりと右の拳を握った。誰に言うわけではなく、自分に言い聞かせるように独白する。

「二、三日は無理だって書いてたけど、今日迎えに来るのはいいよな、麦野」

そして彼はたった一人を助けるために立ち上がり、手を差し伸べた。理由なんて簡単だ。特別ななんて必要ない。ただ、笑って欲しい、あの屈託のない微笑みで。

だから、

「迎えに来たぞ、麦野」

麦野は手を取る事はしなかった。曖昧でぐちゃぐちゃで融解した精神はもはや“麦野沈利”と言う個を保っていない。

故に彼女は陰惨に歪んだ唇で自らを、こう称した。

「私は“麦野”なんかじゃない！ 原子崩し だ！！！！」

「違う！お前は麦野だ、人として笑って悲しめる“麦野沈利”なんだよ！！！」

しかし彼女は肩を揺らしながら嗤う。おかしくて堪らないようだ。

見せ付けるように彼女の周りに限らず、空間に数百は優に超える光の玉が点在する。

「ははははは！私は 原子崩し の全てを理解した。全ての電子が解る。もう人間なんて器じゃない！それこそ“麦野沈利”なんて小さな器に入らないわ！呼吸をするのと等しいくらい自然と演算が可能。これなら本当の出力で 原子崩し が撃てる。身体を崩壊させる事はない！標準を合わせる事も一瞬で終わる！！！」

心が痛くなったのを上条は理解した。人間を捨てたと言うのか？人間であることがそんなに不便だと？

違う………違うだろッ！！！！

「いいぜ、麦野。お前が人を棄てたって言うなら、先ずはその幻想

をぶち殺す!!」

「やってみる! 原子崩し でデメエを原子の塵に変えてやるからよオオオオオ!!」

問答無用で 原子崩し の弾幕が上条に襲い掛かった。回避不可能な程の数。それは原子崩しの視界を真っ白に染め上げ塗り潰す。

「アハハハハ! こんなもんかよ、足りねえぞ!!」

「ああ、そうだな。全然足りねえよ」

僅かに原子崩しの表情が怪訝になる。

おかしい、確かに最低出力だけどアレを防ぐなんて……

実際まだ弾幕の影響で土煙は晴れない。原子崩しは極太の一撃を無慈悲に放つ。

だが、聞き慣れてしまった硝子を砕く歪な音が虚空に響く。彼は土煙から出てきた。無傷とは言えないが、しっかりと二本足で歩いて来る姿に原子崩しは不服だった。

「なんで生きてんだ?」

「お前を迎えに来たからだ麦野」

「“麦野” はいない。それは昔の私だ! 原子崩しが今の私。わざわざ蝶が蛹（ひまな）に戻るなんてないの。そっちこそ何時まで“麦野沈利” って言う幻想求めてやがるツ!!!!」

怒りの咆哮が原子崩しから迸る。瞳は瞳孔まで開き、牙をむき出しにした彼女はまさに獣のようだった。

確かに“麦野沈利”でもここまで墮ちなかつただろう。

普通なら諦める事を諦めない。上条当麻の本質を垣間見た原子崩しは何かがぶち切れる音がした。

「そおかよ。なら 原子崩し の本当の一撃を見せてやる。さつきみたいな弾幕程度の比じゃねえぞクソ野郎ッ！！！！」

「麦野は原子崩しなんかじゃない。お前は“麦野沈利”なんだ！世界でたった一人の“麦野沈利”って言う人間なんだ！いい加減、目を覚まそうぜ！！！」

お互いの主義主張を確かめ二人は同時に理解した。交われない、理解してあげられない。それくらい違うのだ。

そして同じくらい引けない理由がある。

なら出来ることは、全力で対峙する事だけ。対極であるが故に引き合わされた運命なら、ここから先の結末も運命だろう。

彼はただ一直線に走り出した。

「麦野……沈利イイイイイ！！！！」

「上条……当麻アアアアア！！！！」







滝壺は放心した絹旗を支えながらその瞬間を見た。本当ならば自身の身体が吹き飛び跡も残らないであろう出力で 原子崩し を行使した麦野。それを打ち消し謎の龍の顎を出現させた上条。

普段表情に変化のない滝壺もその驚愕の光景の前に目を見開きその頬には冷や汗を流していた。

フレンドと絹旗は完全に啞然として真っ白な状態だった。ほっとくと後一時間は帰ってこないだろう。

だから滝壺は控え目に絹旗の肩を揺すった。

「きぬばた、起きて。むぎのとあの人迎えに行かなきゃ」

「ふえ！？あ、えっと」

「落ち着いて、大丈夫だから。フレンドも起きて」

「結局、あの二人万国吃驚人間……」

世界レベルで驚かれる壮絶な人間に、晴れてフレンドに登録された二人は寄り添うように横たわり気絶していた。

「救急車、よんでフレンド。きぬばた、二人の所まで行こう」

「……………超死んでませんよね？」

「…たぶん大丈夫」

その言葉にきぬばたは泣き出しそうになり滝壺を置いて駆け出しました。

滝壺はまだ五月蠅く騒ぐ心臓を宥めるように深く呼吸をする。あの青年が最高にして最悪の 原子崩し の最大の 一撃を消し去って、麦野を飲み込んだ時からずっとそうだ。逆に二人が激戦を繰り広げていた時は呼吸も心臓の鼓動も忘れていたのに。

「えっと、取り敢えず二人を回収して動きたい訳よ」

「今、きぬばたが二人を運んでる」

自分より大きい二人を軽々持ち上げた絹旗は凄いとしか言い様のない速さで瓦礫を駆け上がっていた。その表情には安堵が見て取れる。

「二人とも超生きてます！」

「それじゃ、その運搬は絹旗に任せて降りよう」

「フレンダも超手伝って下さい！」

そんなたわいない『アイテム』の二人を見ながら滝壺はピクリとも動かない上条に微笑みと感謝の言葉を小さく送った。

「ありがとう、むぎのを助けてくれて」

遠くでサイレンの音がする。

滝壺は願った。

今日の事を切欠にむぎのの世界が変わりますように。

それはいい方向に行ってほしい。初めて会った時から独りで有り続けた彼女の為にも。

今日の星空と月はとても綺麗なものに見えた。

幻想殺し（後書き）

来場者数

祝・一人突破！！！！

……なんだろ。

いろいろ不安になってきたぞ。いや、頑張れ自分！ポジティブに頑張れ！

最近、色んな小説を読み返してますが、やっぱり皆さん素晴らしいですね。

戦闘描写の練習をしなければ。でも生身の人間の戦闘描写って結構難しいんですね。一方通行みたいに音速とかで動ける方が案外書きやすいという罫。

アクションもので、なおかつ普通の人間が戦う読み物はないだろうか。

上条さんの防御力は立派に普通を超越していますが。（浜面も同じ）

## 再入院

声がする。遠くか近くかは分からない。

ただ、声がする。大きく、そして途方もなく分厚い扉を挟んだ向こう側から声がする。低く、高く、唸る獣の声だ。

そして、原子崩しは言った

いつかお前を喰い殺す！！

雷鳴にも似た爆音だった。鼓膜だけではなく全身にビリビリと衝撃が走る。

麦野はそれを、他人事のように聞いていた。

ゆっくりと意識が覚醒していく中、腹になにかが無遠慮に乗っかつ

てきた。

「グエツ！」

「なにカエルみたいな声を超出してるんですかウニ頭？」

「なにつて、お前が飛び乗るからだろ！」

忌々しそつに睨む上条に絹旗は腕を組み見下ろす。その表情はどうか勝ち誇った様なものがあつた。

「これくらいで超騒がないで下さい。一体だれが超ここまで運んでやったと思ってるんです」

「それでもやったら駄目だろう！内臓出る所だったぞ、それよりテメエ誰だ！？」

「自己紹介が遅れました。絹旗最愛です」

あっさり自分の名を明かした絹旗に上条は拍子抜けした。

「絹旗ね。俺は」

「ウニ頭」

「上条！上条当麻だ！」

「そんな事、超知ってますよ。でもウニ頭」

「ウニウニ言うなああ！」



飛び起きた上条に絹旗はベッドから急いで降りるとドア開けて誰かを呼んだ。

「滝壺さん、ついでにフレンダ。ウニ頭が超起きましたよ」

「絹旗、ついでってどう言っ訳よ」

「ついではついでです」

その様子の上条はベッドに腰掛けると身体のおちらこちらに鈍痛が走る。

その痛みに昨夜の事を思い出した。

「昨日はありがとう、かみじょう」

「麦野のことらな気にすんなよ」

「ありがとう」

上条としてはあまり堅苦しくして欲しくなかったが彼女は本当に御礼が言いたいだけで、そうならば上条の答えはこれしかない。

「どうぞ致しまして」

上条に御礼を言ったピンクジャージの女の子は座り心地の悪そうなパイプ椅子に座った。それからドア付近で口論する二人に手招きをする。

「二人とも」

「はい」

それはさながら母親に呼ばれた子のような反応で上条は小さく微笑んだ。

「結局、ニヤニヤしてキモい訳よ」

「な、なんだと!」

「超話しが進まないから止めて下さい」

不毛な喧嘩になる前に絹旗は歯止めをかけると、滝壺が口を開いた。

「滝壺理后っていうの、よろしくね」

「フレンド。ファミリーネームは聞かないでね」

「えーと、よろしくな滝壺にフレンド」

軽く自己紹介も終えた事を確認して絹旗は質問した。

「ウニ頭は超どうしてあんな場所に居たんですか?」

質問ないように“事と場合によっては……”という怪しい響きが混じっており上条は慎重に言葉を選んだ。

「信じるかは絹旗次第だけど、とある電撃使いに追い回されて、やり過ぎす為路地裏の木箱に隠れたら」

「その中身がヤバいものと知らずに？」

「そうだ。そしたら運ばれるは麦野からは攻撃されるは大変だったんだぞ」

「ならむぎのとはいつ知り合ったの？」

この質問は滝壺からだった。

「それは……」

言うべきか上条は迷った。それは出会った時の彼女を思い返せば、いくら友人だからと言って軽々しく話せない。

その様子を見て滝壺は静かに首を振った。

「ごめんね。変な氣と聞いて」

「いや、それは……」

会話が続かない。この嫌な静寂はいつかのファミレスと同じだ。だからフレンドは雰囲気を一転させる為に提案する。

「上条、麦野に会いに行ったら？もう起きてるかもしれない訳よ」

「ああ、そうするよ」

ベッドから降りた上条は包帯の巻かれた足を少し引きずりながら歩いていく。

そして病室から彼が完全に出て行くと、フレンドは絹旗に視線を送った。

「で、あの話し信じる？裏の奴なら早めに処分しないと」

「はつきり言って超怪しいです。LEVEL5を倒せるLEVEL0なんて超あり得ません。あんな能力なら引き込まれておかしくないですし。やっぱり……」

「決めるのはむぎのだよ」

滝壺の静かに制止をかける言葉に二人は押し黙った。そうだ、結論は麦野が下す。麦野なら上条当麻という青年がどの世界の住人か知っているだろう。

上条はスポーツドリンクのペットボトルを二つ片手に持ち麦野の病室を目指す。

パタパタとスリッパを鳴らしながら廊下を歩いていると、向こう側から白衣を着たカエルに似た医者がやって来た。

「おや、歩けるのかい。君の太股辺り挟れてたから不安だったが、

大丈夫そうだね？」

「挟れてた！？」

思わずペットボトルを取り落とす。しかし医者は柔和な笑みでそれを見つめる。

「足が動かなくなるほどではなかったからね？それより彼女に会いに行つてあげなさい。もう起きたから」

「あ、有り難う御座います！」

ペットボトルを取ると上条は走り出した。後ろ姿が小さくなる。医者はカルテを険しい表情で睨んだ。麦野のカルテだった。

「しかし、なぜ……」

「やあ、冥土帰し。そのカルテをくれないかい？」

「……君は！」

上条が歩いて来た道から一人の女性がヒールを鳴らしながら悠々と現れた。

黒く長い髪を頭の高い位置で結び、切れ長の瞳は薄ら笑いを浮かべ、紅を引いていない割には赤く。どこか毒々しい微笑みを口元に刻んでいた。

美と何かしらの魔性を孕んだ雰囲気に屈する事なく、冥土帰しと呼ばれた医者は強固な意志でそれを拒んだ。

「残念だが、渡せないね。本名不詳、コードエラーこれは僕の大事な患者さんの情報だ」

「おやおや、だけどこの不肖不出来の私の愛しい愛しい、研究対象でもあるんだ。どうしても駄目かい？」

「僕の気持ちは変わらないよ」

「アツハツハ！仕方ないね。君を敵に回すのは忍びないから今日は退散するよ。またね冥土歸し」

一語一語が絡み付く抑揚のある声に冥土歸しはどこかうんざりとした顔をする。

「早く帰ってくれ。ここは君が居ていい場所じゃない」

「つれないね。師匠もお元気で」

“師匠”の一言に今度こそ嫌悪の表情をした。忘れたくてたまらな  
いと言いたげな彼に本名不詳は妖艶な笑みを湛えた。

それ以上なにも言わず彼女は歩き出す。来た道を引き返しながら携  
帯を開き通話をし始めた。

「あー、数多？そうこの不肖不出来の私だ。相談したい事あるから  
私の根城に来てよ。……………つまんなくないって。もしかしたら君  
が今研究してる物の糸口が見つかるよ？」

それだけ伝えると本名不詳は携帯を閉じる。口元の愉しげな笑みに

は悪魔の微笑みにも似たものを感じさせた。

「……………う、緊張するな」

昨日の事もあるし、いきなり撃たれないだろうか。そんな心配をする自分の小心さを怨みながらノックした。

「どうぞ」

平坦な声だった。

「失礼します。麦野、大丈夫か？」

「ああ、上条か。あんたに比べりゃ軽傷な方よ」

頭に包帯を巻いた彼女はヒラヒラと手を降る。元気そうな姿にホッと安心した。

「よかった。ほら飲むだろ？」

「……………なんだか、昨日とは反対ね」

「そうだな。昨日は麦野がくれたもんな」

「……ありがとう」

「おう」

軽く受け答えすると二人はキャップを捻り取ると、冷たくさっぱりとした甘さのある液体を流し込む。

口を離すと、麦野はペットボトルを弄りながら問う。

「ねえ上条は、私達と同じなの」

「同じ人間だ」

「それを聞いたんじゃない。私達と同じ事をしたことあるの？人殺しとか……」

そつと麦野は瞳を伏せた。人に誇れる事じゃないのは百も承知でやってきた事だが、後ろめたさがない訳ではないらしい。

その事に上条は内心良かった、と思う。

「ない」

はっきりとした否定の言葉に麦野は身を縮めた。彼女の内では罪悪感が湧き起こる。

真っ白な世界の彼に闇の一端を見せてしまった。そして、何よりも人が無惨に死ぬ姿を見せ付けてしまった。命が尊いと思う彼にその姿はどの様に映ったのだろうか。



「……麦野。お前がしてきた事を聞かない。だからそんな顔するなよ」

「でも上条には汚い世界を見せたのは事実。本来なら私は上条を殺さないといけない。……見られたから」

泣き出しそうな麦野を見て上条は彼女の頭に右手を優しく置いた。それからゆっくりと髪を梳く。

「麦野は俺をどうするんだ？」

「……あんたがあの場合に居たこと隠蔽する」

勿論、バレたら厳罰ものよ、と麦野は苦笑した。上条を一時的とも永遠ともどちらに転がるか分からない処置をするのは、きっとそれが限界なのだろう。

「いいのか俺の為なんか？」

「うん、いいの」

麦野はシーツを強く握り締める。どこか覚悟を決めた面持ちをしていた。

それから何かを思い出したように上条に振り向く。

「上条、最後あんたにしたの？」

「え？なにな……」

「あなたの右手から竜の頭が生えたのよ」

「……………?」

「呆れた。覚えてないのね」

眉間に皺をよせ考え込んでいた上条に突き放すような一言を放つ。しかし仕方ない、覚えてないものは覚えてないのだから。

「わりい、なんのことだかサツパリ」

「しょうがない。ならもう聞かないわ。この病院の医者、腕が良すぎるから明日には快復できるわね」

「なら退院パーティーでもするか？」

スパーン！と扉がいきなりスライドして二人は身体を強ばらせたが、明るい声が聞こえた。

「それは賛成な訳よ!!」

「フレンダ！そこはラブシーンを超堪能するために息を潜めるべきです！」

飛び出してきたフレンダを引き止める絹旗。しかしもう遅い。

「フーレンダア、それに絹旗あどっから聞き耳立ててたのかにゃーん?」

「……」  
「ごめんなさい」

「テメエ等、下半身に別れを告げる……！」

「ぎゃああああああ……！」

「おいおい、喧嘩すんなよ。それにパーティーなら多い方がいいだろ？」

「それとこれとは話が別だ！」

「上条！助けてほしい訳よ！」

「いやあああ！超助けて下さい！」

足と腰にしがみつく二人をあやししながら上条は麦野を宥める。意外と重労働だ。

「なにしてるのみんな？」

遅れて来た滝壺がその不思議な光景に首を傾げる。

「お、滝壺。俺と麦野が退院したらパーティーやるんだけど来るよな？」

「行く」

間髪入れずに滝壺は返事した。麦野は勝手パーティーをする方向で進んでいるのが気に入らないのかそっぽを向く。

「私は行かないわよ」

「むぎのも来るって」

「ちよつと滝壺！」

「むぎの」

「なによ」

「………来ないとストライキするよ」

「仕事しろ！」

「いやいや、それ麦野がいつでも説得力ない訳よ」

「ああ！フレンド言うようになったわねえ？」

殺し屋も泣いて逃げ出すような悪辣な顔をした麦野に睨まれたフレンドは素早く上条の後ろに隠れた。

「麦野対策！」

「巻き込むな！」

「かーみじょお、恨むならフレンドを恨めよ？真っ二つにしてやる  
！！」

「うおおおい！」

「上条頑張つて！」

無邪気に騒ぐ『アイテム』を見て滝壺は初めて皆が心から笑っているのを傍観する。本当に上条当麻は不思議な人間だ。

心は無条件に許せる。そんな人がむぎのの側にずっといてくれたら、でも

だが、心の中でその考えを否定した。上条の気持ちを無視しては意味がない。彼が麦野を選ぶには、……………つまりそうするしかない。

## 愛のキューピット作戦

絹旗とフレンドにも協力してもらおうと滝壺は策を巡らし惟る。多少強引かもしれないが、そこはご愛嬌。そしてそれでも駄目なら、諦めよう。

「いらつしゃーい」

間延びした声が木原数多を出迎えた。

「こいつつうから来てみりゃ、何やってんだ？」

「ん、『ピンセット』を使って情報収集」

右手についた金属グローブのようなものを指差しそう答えた。人差し指と中指の二本にはガラスで出来た長い爪のようなものがついていて、そのガラスの中に、さらに細い金属の杭のようなパーツが収まっている。

「勝手に使っているのかよ？」

「私の根城の一品だよ？そんなのいらない。でもアレイスターには許可貰ったから大丈夫でしょ」

そう彼女の根城と言うのは、第一八学区・霧ヶ丘女学院の近くにある素粒子工学研究所だった。

それから『ピンセット』を操作しながら空中に存在する、そして空中に漂う何かを掴んだ。

「ほおやっぱり『滞空回線』の情報網は素晴らしいね」

「早くしろ、俺は忙しいんだよ」

「0次元の極点」

「!？」

その言葉に木原は驚愕の表情を浮かべ、その反対に本名不詳の女は淡泊な表情だった。『ピンセット』の操作をしたまま木原に背を向け取り出した詳細なデータを機器へと転送させる。

「不肖不肖のこの私も調べたんだが、アレって素晴らしく面白いね。どんな猫箱か気になって仕方ないんだよ。千変万化の神秘を現実に取り引き下ろすのは楽しいもの」

「それをどこで知った？」

「おや、私の情報網が卓越してるのは知ってるだろ？今更驚かないでよめんどくさい」

言及されたのにそれをしれっと突き返した本名不詳はつまらなさそうに肩を竦め、ファイルに綴じられてあった書類の紙束を真っ白なテーブルに並べた。

「それで、一次元を破る能力者を見つけたんだ」

「けっ、よく言っぜ」

「ふて腐れるなよ。不肖不肖のこの私が0次元に興味を抱き、適応する能力者を見つけられたのは数多のおかげだ」

褒められる事はどうでもいい。しかし目の前の女の甘言に木原はあからさまに嫌そうな顔をして床に唾を吐いた。

「気持ちわりいんだよ。口閉じろ」

「はっ、君はやっぱり言うねえ。ぶち殺したいわ。でもまあ、血縁者だからいいか。不肖不出来のこの私と違って数多は優秀だからね」

「なにが不肖不出来だ」

木原は忌々しそうに女を見据え牙を剥き出す。それは肉食獣がさらなる化け物を威嚇するそれに酷似していた。

「木原一族の最高傑作がよお！」

女は無言で笑った。静かに微笑みを湛え、木原の敵意をそよ風程度に受け取ると内ポケットから写真を取り出しテーブルに置いた。

「そんなのどーでもいい。適応する能力者は第四位のLEVEL5 麦野沈利。性格に難ありだけど全然OKでしょう。それとも私がやっつていい？」

「好きにしろ。それこそどーでもいい」

「あら残念。もうちょっと食いつくと思ったのに」

楽しみが半減してつまらなさそうに唇を尖らせるが、それもいいかと開き直り本名不詳はパソコンを起動させた。

「むしろお前に目を付けられた第四位サマが可哀想だぜ」

「酷いな。私は一途だよ？今は彼女以外どーだっていい。しっかし0次元の極点か。応用はどれくらいかな？ 未元物質 や一歩通行



くらいほしいな。でないといつまらない」

嬉々としてキーボードを弾く本名不詳をほっというて木原は資料に目を通した。

そしてとある項目に目を細める。

「原子崩し の一時的覚醒？」

「あん？ああ、それ。 原子崩し は昨日一時的に一方通行と同じ段階まで昇華したけど、残念。不明な理由で元のただのLEVEL 5になっちゃった。まあ、恐らく覚醒前より各段に能力は飛躍してるだろうけど」

彼女は説明し終わると白衣を来て別の部屋へ飛んで行った。

「……貰ってくか」

木原は勝手に重要だと思われる部分を抜き取りそのまま研究所を後にした。

しかしその程度ならこの本名不詳には蚊に刺された程度。別に気にも止めないだろう。

そして移動した彼女は昨日の出来事を文字の羅列にして処理していた。

「不明な理由の原因、 幻想殺し か。……………イラつくなあ！折角の研究対象の価値下げやがってよお！殺せないのが口惜しいわ」

悪鬼のように醜悪に顔を歪め流れていく文字に毒を吐く。無意味と

わかっていてもこの怒涛の怒りは鎮められない。

気を取り直したように、本名不詳はニンマリと笑った。

「ま、いつか。大切なのはこれからだ」

再入院（後書き）

お気に入り  
五十人突破！

有り難う御座います！本当に有り難う御座います！

しかし、上麦って人気なんですね。

## 祝・再退院

「体の方に異常はないね？」

「これと言って」

「そうか。……君には話さないといけない事があるんだ」

麦野はカエル顔の医者が張り詰めた表情をしている事に内心強張った。

「君の精神が恐らく、二つに分かれている。もしそうなら、能力を使う君に何らかの負荷が生じるだろうね？だから、少しでも変だと感じたら連絡をしなさい。いいね？」

「……………はい」

少しでも目を背けていたかったが、改めて目の当たりにした自分の中の変化に麦野は困惑した。無意識で手を白くなるほど握り締める。その力んだ肩に冥土帰しは優しく手を置いた。

「あまり抱え込まない事だ。自分が自分に押しつぶされてしまうよ」

「有り難う御座います」

嗚呼、なぜこの世界はこんな人殺しの自分に優しくしてくれるんだ  
ろ

「それじゃ、御大事に。君は既に僕の患者さんだ。遠慮はいらない  
からね？」

「でも、出来るだけ自分で解決したい問題ですから頼るのは、最終  
手段です」

それもまた一つの道だと、冥土帰しは頷いた。

「麦野ー！タクシー来たよ！」

「はいはい、すぐ行くから！先生、有り難う御座いました」

「うん、上条君にもよろしくね？」

穏やかな微笑みで見送ると冥土帰しはゆっくり病院に戻っていった。  
彼を必要としている人々は今日も絶えない。

それは、彼が本当の医者だからだろう。

助手席に深く座り込んだ上条は後ろで騒ぐ女子四人、いや三人の会話を居心地が悪くなった。

「うう、納得いかない。超納得できません！」

「なによ絹旗。あんたなんで泣いてんの？」

後部座席には三人までしかスペースがない。なので出た提案は、絹旗を麦野の膝の上に乗せる、だった。

しかし、この歳特有の子供扱いしてほしくない！という彼女にはこれはちょっと屈辱的らしい。

「中学になつて、膝の上抱っこなんて超あんまりです！………それに」

「中学つてあんたまだギリ小学生じゃないの？十二歳でしょ」

いじけた絹旗の頭を撫でながら麦野は彼女の言った矛盾を指摘した。しかし絹旗はそれ以上、思う所があるらしく聞いてない。

「どうして麦野はそんな我が儘ボディなんですか！？理不尽です！超理不尽すぎます！」

「藪から棒になによ」

「その辺を否定しないあたり、やっぱり麦野は凄い訳よ。でも絹旗の言いたい事分かるなあ。どうしたらボン！キュッ！ボン！の凹凸スタイルになれるの？秘訣はなに？」

「お前らセクハラで訴えるぞ。人をそんな目で見てんじゃないよ！」

「背中に当たる感覚が超妬ましい！」

「なに！それは羨ましい訳よ！！」

なにやら胸の大きさ談議になりつつある流れを上条は聞き流す。この話題には関わらない方がいい。と直感が告げる。

しかし上条の後ろの席に座る滝壺は不思議そうに聞いてきた。

「かみじょうも胸が大きいと嬉しい？」

「うえ！？い、いやぁ気にした事ないかな」

「え？男の人って大きな胸が超好きなんじゃないんですか？」

「それは超偏見です！」

絹旗の間違った男性認識を改めつつ、上条はどっと疲れた。基本、ガールズトークは男が理解できない話題や意識の相違がある。この場合だってそうだろう。

「絹旗は背伸びしすぎじゃないか？子供扱いに不満を感じるの分かるけど、もうちょっと無邪気にしてた方が可愛いぞ？」

「む！でも子供って言うことでジェットコースターに超乗れなかった私の気持ちを超考えて下さい！」

「ごめん、絹旗は無邪気だよ。そのままできて」

「ウニ頭の癖して超生意気です」

頬を膨らませて不機嫌なのをアピールしているのか、それともいつもそんなのか上条の知るところではないが、そうしていると年相応の子供だ。

そんな子供が人殺しをしてるんだ。上条がつい思いにふけてしまいいそんな事を心の内で呟いて、虚しさと悲しさがそこにあった。

彼女にこの気持ちを打ち明けても同情としか受け取ってもらえないだろう。でも思わずにはいられない。

激しいジレンマだ。社会が彼女に強要している事は許せないが、自分に対抗できる何かがあるわけじゃない。無力と言う言葉がこんなにも心を抉るなんて知らなかった。

「……………はあ……………」

こんな荒んだ心でどんな綺麗なモノを見ても色褪せて見える。

「どうしたのかみじょう？」

「うん、平和だなあってさ」

今、この時が。

しかし感傷に浸っている暇をくれなかった。

「なんだか上条って早死にしそうな訳よ」



「なんですと!!」

「今のは確かにB級映画の超死亡フラグ台詞並みでしたもんね」

また車内が盛り上がった時、麦野が運転手に声を掛けた。

「すみません、この辺りで私降ります」

「あれ、どうしたの麦野？」

フレンドの問い掛けに麦野は面倒くさそうに明るい栗色の髪をかき上げた。

「仕事よ」

「!」

その一言に、特に後部座席の皆は顔色を変えたが麦野はさらに続ける。

「半導体の切断とか、マイクロチップの凄く小さき奴の切断とかチマチマしたのをやるの」

「あ、なるほど」

安堵が含まれた絹旗の声に麦野は頷くと携帯の時計を見た。

「だからパーティーは昼か夜ね。滝壺達は外食かなんか考えといて」

「結局、押し付けられた訳よ」

若干、棘があるフレンドの愚痴に麦野は勝ち誇ったように胸を張る。

「いいじゃない。私と上条の退院祝いなんですよ？それくらいやんなさいよ」

「任せて」

そう言ったのは滝壺で、麦野は珍しいものを見るような視線を送った。

しかし滝壺はいつも通りなにを考えているか分からない。

そこに上条が恐る恐る声を掛けてきた。

「邪魔じゃなかったら、ついて行ってもいいか？」

「大丈夫“普通”の仕事よ」

「駄目、か？」

「……………」

声もそうだが、表情からして上条が捨てられた子犬に見えた。あまりに悲痛な面持ちで俯き、麦野にやんわりとだが拒絶されたのが響いたのだ。

そこに、さあどうする？と言った『アイテム』メンバーの視線が麦野に突き刺さり彼女は苦虫を噛み潰したような表情をする。

暫くの沈黙の後、麦野が観念したように両手を上げた。

「分かった。降参よ。付いてきてもいい、でも上条は凄く暇になるわよ絶対にね」

「ああ、それでも構わない！有り難う麦野」

「有り難うって大袈裟な……」

呆れながら麦野はタクシー代を払うと上条と共に車内から出た。

硝子越しに三人が手を振る。それに応えるように上条が片手を上げ、麦野は適当に返す。

タクシーは滑らかに走り出し、車道の向こう側へと姿を消した。

「それじゃ、行くか」

「そうね。少しバス移動するわよ」

そう言う彼女は歩き出した。慣れ親しんだ道なのだろうか、迷わずバス停までたどり着くと時刻表を確認してベンチに座る。上条もその隣に座った。

「後、六分くらいね。上条はなんで私についてきたの？」

「たぶん麦野の事を知りたかったからだ。俺なんか踏み入れられない事ばかりだけど、今みたいなことなら良いんだよね？」

「まあ、ね。でもLEVEL5は基本能力やその他の事にはかなり秘匿されるの。公開されるのは案外名前くらいよ、本当に。だから私が仕事してる所見られないかも」

ロングブーツを穿いた脚をぶらつかせながら麦野は真っ青な空を仰いだ。

「いいさ。俺が勝手についてきたんだ。終わるまで待ってるよ」

裏表のない優しい彼の本音に麦野は空見詰めたまま溜め息をついた。どうしようもなく暖かい。

「捨てた筈なのに、棄てて溝に浸かった筈なのに。なんであんたはそんな事言うの?」

「麦野が棄てたなら俺が拾ってやる。簡単な、生易しい問題じゃないのは百も承知だ。でも、やっぱり笑ってほしいんだ。これは俺のエゴだけだ」

最後の一言に麦野は笑った。全くその通りだと。そしてその行為を黙認し、止めさせない自分は

「全くもって大馬鹿ね」

「どうしたんだよ急に?」

「上条だけには絶対に言わない」

彼は言ったのだ。自分が捨てて、棄てたモノを拾ってくれると。な

ら、彼の前ならきつと人間である“麦野沈利”が許される。人の心を棄て化け物になる事を選択しなければならぬ暗闇の世界だけじゃない。

それだけで、心がこんなにも軽くて自分の中の氷の世界がゆっくり融解していく。

そう、ゆっくりと“溶け出す”

溶け出す？融解？

刹那、麦野視界が闇に染まり胃をひっくり返したような不快感に襲われた。慌てて口元を押さえ呻くと、上条は急な展開に当惑。

「ぐう！……んッ！」

「おい、大丈夫か！？」

背中をさする上条はこれが焼け石に水だと分かった。麦野が苦痛の為にさらに顔色が悪くなっていく。嫌な汗が噴き出し呼吸音もさらに小さくなっていく彼女を見て上条は携帯を急いで開き、救急車を呼ぼうとしたら麦野がそれを止めた。

「だい、丈夫だから」

「どこが大丈夫なんだ！顔面蒼白な奴に言われても説得力無いぞ！

「？」

「いいの。……本当に、大丈夫」

息も絶え絶えに言葉を紡ぐ麦野は一度、大きく空気を吸い込むと上条に寄りかかった。

「麦野？」

「うん、大丈夫。だいぶマシになった」

吐き気のために猛烈な頭痛にも襲われ正直、死ぬかと思ったが身体は持ちこたえてくれた。

優しく背中を叩きながら上条は麦野を心配そうに見詰める。

「無理すんな、ってもう遅いか」

「なにか、思い出しかけたんだけど。何だったかな？」

虚ろな瞳で囁く麦野の言葉に上条は首を捻った。

「なにを忘れたんだよ？」

「解ったら苦労しない。昨日の事、実は途中から虫食いみたいに記憶がまばらに飛んでるの。あの医者も不思議がってた」

なんと返したらいいか分からず黙っていると麦野は立ち上がった。慌てて支えると麦野はまた大きく呼吸をする。

「ふう……。ありがとう。バス来たわよ」

「今日は家に帰ったらどうだ？」

「……実は最近この手の仕事サボってたから、今日来なかったらヤバいのよね……」

「麦野……、今度からちゃんとやれよ？」

「……… 確約はしない！」

開き直った彼女はもういつも通りでバスの中に入っていった。その後から上条も乗り込む。

人が少なく、上条達は適当に空いた場所座った。

「どこまで行くんだ？それまで寝てていいぞ」

「人前だともう眠れないのよ」

彼女の歴史の一端に触れた気がした。

それは上条が想像する以上に黒く冷たいものだろう。

「そうか、仕方ないな。でも麦野、無茶はするなよ？」

「それも確約しない」

「そこはしてくれ……」

麦野は返事を返さず黙って窓の外を見た。

それから30分は無言を押し通したが麦野が降車するボタンを押した。

「次か？」

「そ、半導体研究所とかよ」

バスが止まり扉が開くと麦野と上条は料金を払い降りた。そして目の前の建物に麦野は慣れた感じで入って行く。

自動ドアをくぐり、中に入るとクーラーが稼働している音がする。涼やかな微風に癒されていると、麦野が上条を手招きした。

「なにやってんの、こっち来なさい」

「悪い、クーラーの風に当たってた」

「おや、君は誰だい？ああ、それとやっと来たんだね麦野さん」

白い廊下の奥から姿を現したのは、真っ黒の髪を頭の高い位置で結った女だった。化粧のない顔は清潔感があり、唇は紅を引いていない割には赤く、どこか毒々しい。

その女の顔を見て麦野は表情を消した。

「一応聞くね？君は誰だい、麦野沈利さんの友人それとも……」



「私の付き添い」

「そっか、つまらない所だけごゆっくり」

素っ気ない麦野の返答にも眉一つ動かさず受け答えると、女はのんびりと歩を進めた。

「いつものアレお願いね。ナノメートル並みのサイズは君の極細原子崩し じゃないと無理だからね。三ヶ月もほったらかしされたからどうなるかと冷や冷やしたもんだ」

嫌味なく言っているつもりなのだろうが、元来絡みつくような抑揚の声で喋る彼女がどんなに賞賛しても嫌味に聞こえてしまう。

おかげで麦野の眉間には縦皺が刻まれた。

「喋んなクソババア！気持ち悪いんだよ！」

「あつは！君も言うつねえ。麦野さんにはいろいろ期待してるからお灸を据える事が出来ないのが残念だあ」

麦野の発言にも憤慨した様子は見せず、おっとりした声で言ったお灸を据える発言もなんだか冗談じみて聞こえる。

「さて、持ち場について貰おうかな？なんせ三ヶ月分もあるんだから。ああ、君はこっち来てくれるかい？そっちは麦野さん専用通路だからさ」

麦野と同じ扉を潜ろうとした上条に女は声を掛けた。

上条は頷くと麦野に振り向く。

「なんだか、一緒には居られないみたいだな」

「……仕方ない。それじゃまたね」

一瞬だけ、迷った素振りを見せたが無理に自分を納得させると麦野は一人、扉の向こうへ消えてしまった。

「おいで」

「あ、はい!」

女は先導する。ヒールを鳴らしながら長い廊下を歩く。上条はその後ろについて行った。

それから突き当たりの扉を押し開くと、上条を招き入れ扉を閉めた。

そこはガラス張りの壁で下が見下ろせる造りになっている。女は椅子に座ると目の前の機械を操作し始めた。

「ねえ、君の名前は?」

「上条当麻です。えっと……」

「ん?ああ、私の名前は本名不詳だ。コードエラーよろしくね上条君」

「いや、名前じゃないですよ」

思いつき名前が無いと言っている彼女に上条はどう対応しているのか分からなかった。

「うん、名無しだよ。名前がない歴〓年齢だからさ」

「彼女居ない歴みたいに言わないで下さい。なんだか締まりがないですよ」

「好きに呼べばいい。それに敬語なんて使わなくていい。人の為になるような事してないし」

無機質な音を出す機器を操りながら本名不詳と名乗った女は手元のモニターで部屋に入ってきた麦野を見るとマイクを手に取った。

「いつも通りやるぞ」

「いつも通り頼むよ」

短い会話を終わらせると麦野は天井からぶら下げてある板に向かって原子崩しの極光を撃つ。普通の板なら貫通しているが、特殊な物らしくぶつかつた原子崩しの極光を細く升目になるようにして、向こう側にある半導体を切断した。

それが終わると直ぐに新しい半導体の板が出て来る。また麦野が特殊な板に原子崩しを当て、加工させら極光は半導体を斬る。

何とも単純な流れ作業だ。

「案外、地味なんだな……」

「でも、麦野さんにしか出来ない事だ。もうちょい精密さが上げれば拡散支援半導体の板なんて必要なくなるかな？」

「シリコンバルーン  
拡散支援半導体？」

本名不詳の口から出てきた不思議ワードに上条は首を捻った。

「うん、彼女が初めて拡散支援半導体を使った映像あるけど見る？」

「じゃ、ちよつと見ようかな」

軽く二つ返事をする女は手元のモニターを変え映像を流し始めた。

そこには今よりも三、四歳は幼い彼女が映し出され、カードのような物に向かって 原子崩し を撃つ。それがなんと一四本の極光に枝分かれした映像だった。

それを見て上条は冷や汗を流す。見覚えがありすぎる。昨日のアレだ。

「さっきのが拡散支援半導体さ。こうやって便利な物に使えるわけだ」

「戦闘向きな道具でもありますよね？」

「なに、アレを喰らったことあんの？」

「……………」

沈黙を肯定と取った本名不詳は長い溜め息をついた。

呆れた表情の彼女は麦野に物を言う訳ではなく上条に言った。

「どうやって生き延びたよ」

「運？」

「幸運だね。つか拡散支援半導体を使わせる状況にどうやって追い込んだの？」

「…さあ？」

「ふうーん」

両者なにかしら含みを持たせた一言に会話が切れる。そこに麦野の怒鳴り声が響いた。

「おい！いつまでやんだよッ！」

「後五十枚。三ヶ月って偉大な時の流れだね？」

「お前絶対根に持つてるだろ！！」

「さあね。お仕事溜めたのは君だよ君。麦野さんはキリキリ働く」

「……覚えとけよ」

マイクのスイッチを切ると本名不詳は頬杖をついて、流し目で上条の右手を見た。

「上条君は麦野さんと恋仲？」

「いやいや、あんだだけの美人が上条さんなに振り向くわけはないですよ。てか恋仲なんて今時使う人居たんですわね」

「最近のカップルだとか恋人だもんね。接吻とか近頃のガキは知らないんだろうなあ」

しみじみと呟きながら本名不詳は椅子に座ったまま背伸びをする。

上条は撃つ速度を上げ早く終わらせようと躍起になった麦野を観察していた。

「おお、速い速い」

「彼女、飽きると雑にぶっ放すからね。でも中心点ズレてないのに連射速度とか上がったな。まあ何せ三ヶ月前の情報だし、進歩するのは当たり前か」

本名不詳は嬉しそうにメモを走らせると内ポケットにしまった。

今回の仕事が終わった事を伝える電子音が鳴る。それを止めると女は上条を手招きした。どうやら部屋を出るらしい。

「つまんなかったろ？単純過ぎる流れ作業でさ」

「でも、真面目な顔をしてた麦野が新鮮だったかな」

「いつも彼女、どんな顔してるの？」

廊下にはヒールで硬質な床を叩く音だけが虚しく響く。

「憂いた表情をしてる」

「そうか」

「なんとかして笑顔にしてやりたいんだ」

「それは難しいね」

声音を変えることなく上条に言葉を突き刺す。

「でも、諦めてたまるか」

「出会って日の浅い君がなんでそんなことにこだわるの？」

「目の前で泣いてる人を放っておけないだろ？」

「それは君の価値観だ。私は違う。きつと放っておくさ、面倒だしね。なによも」

さらつと上条の倫理をばつさり切り捨てた本名不詳は歩調を変えない。そして振り向かない。子供の心を砕いたとしても自分を中心とした堅い精神は傷つかなかった。

そこらの奴らなら上条の事を偉いと賞賛するかも知れないが、内心夢物語だと馬鹿にする方が圧倒的に多い。恐らくこれが一般の対応だ。

だが本名不詳は上条の考え方自体、と言うよりも自分にそれが当て

はまらない事を指摘した。なににも皆が優しく強い訳ではないと、彼女は遠回りながら言っている。

何となく頭で彼女の言いたい事が理解出来た上条はその後ろ姿を見つめた。

「本名不詳さんって実は嫌われ役買ってでるでしょう？」

「あつは！そー言われたのは初めてだな。ただ個人と言う単一存在は大切なだけだよ。代替え出来ないんだから困りもんだ。特に研究だとそう」

最後の一言が無ければなあ、と上条は呟いた。それは彼女に届いたかは解らないが、本名不詳は楽しそうに扉を開けた。

その先には麦野が腕を組んで待っていた。ややご機嫌斜めである。

「お疲れ様麦野さん。銀行に振り込むからご心配なく。それとも現生がいい？」

「銀行でよろしく、行くわよ上条」

「えっと、またいつか！」

先に行ってしまった麦野を急いで追いかけて駆け戻した背中を見ながら本名不詳はニコニコと笑った。

「うん、必ず会うよ君達とはね？………しっかり面白い子だ。稀にみる純朴青年、絶滅危惧種だよ」



喉に引っかけたような笑い方をすると次に舌なめずりをした。獐  
猛な獣と言うよりは執着に獲物を狙う爬虫類、特に蛇のそれに近い。  
携帯が控え目にバイブと音で着信を知らせる。取って耳に当てると  
彼女の第一声はこうだった。

「どうしたアレイスター？」

祝・再退院（後書き）

ふう、これで何話目だっけ？

## 帰り道の出来事

麦野と上条が研究所を後にして、残った本名不詳は携帯片手にパソコンのキーを弾いていた。

「んー、麦野沈利の能力は確かに上がった。けど、覚醒してはいないみたいだ。冥土帰しのパソコンにハッキングして分かったけど、彼女記憶が一部分欠落してる」

「なるほど、記憶の欠落、か」

「こちらの推測だが、幻想殺しのせいだよな？彼が殺した、若しくは麦野沈利の奥深くに閉じ込めたのは“原子崩し”だ。記憶が欠落してるのは、思い出しただけで覚醒して今度こそ麦野沈利が喰われるのを手前で食い止めてる程度。ギリギリ人間でいる状態。ねえ、彼女に暗部の仕事回していいの？」

「推測は外れてない。そうなのだろう。彼が幻想殺しに願ったのは、人間を捨てた麦野沈利を元に戻すことだ。暗部の事、特に『アイテム』は君に一任しよう」

携帯端末の奥から、男にも女にも、老人や子供にも聞こえる悪寒のする声。しかし本名不詳は特別気にはしていなかった。彼女の器が大きいのではなく、ただ同じくらいの変人なだけだ。

「コイツ、全権私に投げ捨てやがったなこん畜生。……0次元の極点には支障はないから、別に覚醒促す事はしなくていいんだけど」

「いや、覚醒をさせてくれ」

珍しいアレイスターの欲求に本名不詳は指の動きを止める。情報処理に割っていた集中力を会話に集中させた。

「なんで、発狂するよ絶対だ。一方通行の比かどうかは分からないが損害は被る」

「プランの一つである 幻想殺し の力があの戦いで鱗片を見せた理由はそれだけだ」

「はあ、なんだかややこしい。ついでに 幻想殺し もよろしくって事かい？」

小さく零れた笑い声に本名不詳は肯定と 受け取った。

「……今年は何年だな」

抗いようがないのでせいぜいたつぷりの皮肉を込める。相手は特に意に介さず特有の声で別れを告げた。

「では、朗報を期待しているよ」

「アンタがやれ」

切実な言葉は携帯のツー、ツー、と言う飲み込まれ本人の耳以外入らなかった。

「あーッ！やっと終わった」

「どんだけ仕事ため込んでたんだよ」

「さっきの五ヶ月溜めた奴と半導体切断の奴、三カ月分の仕事を溜めてただけよ。まあ流石にヤバかったわ」

すっかり太陽が真上に来ていた。病院を早朝に出たのが嘘のようだ。

「その口調だとあといくら放置してんだ？」

麦野は指折りに数える。

「五個くらい？」

「悪いこと言わない。今から仕事を消化しに行こう」

「やだあ」

「可愛く言ってもダメ！」

「……脱いでもダメ？」

思わず上条の視線が麦野の豊かな膨らみに向く。服の上からでも分かるくらい豊かな胸だ。ふと、絹旗の言葉が回想された。

『背中に当たる感覚が妬ましい！』

無意識に喉が鳴る。

ニヤニヤと笑う麦野と目があった。

あらぬ方向に思考がぶっ飛んでいた上条は、我に返るとさっきの自分を厳しく叱りつける。

しっかりしろ上条当麻！お前は紳士だろうがッ！！！！

「脱ぐのはもつとダメだ！公衆の面前ですよ麦野さん！！」

「鼻の下伸ばしてたかーみじょうが言う台詞じゃないわよね？」

痛い所を突かれてぐうの音も出ない。

「否定できません。でも、いきなり脱ぐだなんて言われたら驚くだろ！？ハッ、まさか最近の学園都市の都市伝説にある“脱ぎ女”は麦野だったのか？！」

「ちよっ！変な言い掛かり止めなさいよ！誰が人前で脱ぐか！！」

道の真ん中で堂々と喧嘩し始める二人は周りの視線を否応なく集める。しかし殆どの人はチラ見程度だ。

「言つとくけど露出癖なんてないから！！」

「説得力がないと感じてしまうのはなぜだろう……」

「かーみじょう」

「はい！なんでもありません！！」

麦野の周りに不健康な色をした発光体が浮遊する。上条は反射的に敬礼をした。

すると不意に予想だにしない方向から声を掛けられた。

「すまない、青い車を見なかったか？」

「はい？」

声をした方を二人同時に振り向くと、なんだか眠たそうな顔をした、そして目の下に隈を深く刻みつけた女性が少し困り顔で立っていた。

「実は車を止めた駐車場を忘れてしまってたね。交差点の近くだったんだが……」

「ジャケット風紀委員に聞けよ」

突き放したような麦野の対応に上条はギョツとしたが、女性は気にせず腕を緩やかに組んだ。

「ああ、そう思って歩いて居たんだが見つからないものでな。暇そ  
うな君達に手伝って貰おうと思ってね」

さざりと酷い言いようである。

「時間あるよな麦野？」

「ん、なに助けるの？」

「ああ、そつだ」

「はああ、発病した」

「なんだよ、その言い草は」

そんな言い合いをしていると、女性は手で自分を仰ぎポツリと眩く。

「熱いな……」

ワイシャツのボタンをプチプチと外していく。あまりにも普通に外していくために啞然として行動を起こせない二人。

周りの反応など無視して女性はワイシャツを脱ぎ、見事上半身下着になった。

「っ!??」

絶句するしかない。

女性はシャツを腕にかけると額を拭つ。

「炎天下の中歩くと疲れるな」

「……………それよりシャツ着ろ」



麦野は声を絞り出して女性に命令するが、彼女は腰に手を当てよく分からない顔をした。

「なぜだ。暑いじゃないか」

「いやいや、早く着て下さい!」

今まで石になっていた上条はシャツを奪い取ると女性に着せようとした。

麦野はその対応はちょっとマズいと思って注意しようとしたら、何処からか悲鳴が上がった。

「女の人が襲われてる!」

ああ、やっぱりそう思ったか。と麦野は独白する。

そして別の所から怒鳴り声が出た。

「あ、アンタ!なに公衆の面前で女性襲ってんのよ!.....天誅ッ  
!」

「ゲッ!ビリビリ、これは違っ」

「問答無用だあああああ!.....!」

真っ直ぐ中学生くらいの女の子が上条に突進する。上条はシャツを麦野に押し付けると、中学生から逃げるために走り出した。

「不幸だあああああああ!.....!」

お決まりの台詞を絶叫しながら全力で駆け出す背中を黙って見つめ、手の中のシャツを上半身ほぼ裸の女性に突き出した。

「自分の為じゃなくて、私の為だと思っならコレを着る。いや、着て下さいお願いします」

もう土下座してでも着てほしいくらいだ。

彼女はシャツを着る事を承諾した。しかし涼のある場所に行くと言う条件で。

「ここは涼しいな。生き返ったようだ」

「私はアンタを殺したい気分だ」

麦野は頭痛のする原因を半眼で睨むが女性は椅子に座ると、スープカレーのカンを差し出した。

「なんでホット？」

麦野はオープンカフェの安い椅子に深々と座りながらそう尋ねた。

さつき目の前の女性が言ったようにオープンカフェなのに涼しいのは空調を工夫しているからだ。

「暑い時には熱い物が健康にいい。それにカレーのスパイスには疲労回復を促す成分がある」

「いや、理屈は理解できた。でも暑いと冷たい物を飲むのが普通じゃない？」

「む、そうか。若い娘はそう考えるものなんだな。買い直してくる」

「大人しく座ってて。それにゲテモノ買ってきそつで怖いから。で、アンタ名前は？」

「私は木山春生だ。君は？」

木山と答えた女性は椅子に座りながら質問した。

「……麦野沈利」

淡泊に答えると木山はスープカレーを飲む手を止めた。

「麦野？」

「聞いたことくらいあるんでしょ。第四位 原子崩し くらい」

「君がか。なんだか普通の人だな」

「外見まで化け物でたまるか」

木山は再びスープカレーを飲みながら流し目で麦野を見つめた。

「どうした、飲まないのか？」

「……………いや、それは」

「うん？」

「いただきます」

麦野は一気に飲み干すと体温が上昇したのを感じた。

「いい飲みっぷりだね」

「酒の方が飲みたいくらいですよ」

「だがしかし君は学生さんだろ？高校生ならまだジュースだ」

その言葉に麦野は感動し打ち震えていた。今の今まで大学生だと散々思われていた中で、恐らく唯一彼女が自分の学生の位を一発で見抜いたからだ。

ちよつと嬉しくて泣き出しそうだ。

「木山さんっていい人ですね」

それだけで良い人なら安いもんである。

しかし木山は瞳を伏せた。

「いい人が……」

「どうしました？」

小さく振りかぶると木山は顔を上げた。

「いや何でもない。さて……」

「うわあっ！」

立ち上がろうとした彼女に不幸な出来事が起こった。

それはとある少年がアイスを買ってもらいはしゃいでいると転けてしまい。しかもアイスが木山のスカートを汚した。

「ご、ごめんなさい」

うなだれて涙声になりながら謝る少年に麦野は少し感心した。きちんと謝れるなら許すべきだ。

木山は少年の頭に手を優しく置くと微笑みながら言った。

「心配するな。脱げば大丈夫だ」

そう、脱げば……って！！

「だから脱ぐなッ！！」

「へ？」

スカートを太股辺りまで脱いだ木山は突然怒鳴った。麦野に疑問の声をぶつけた。

少年はもう真っ白になっていた。

「まったく、こっちに来い！」

スカートを穿かせると麦野は木山は女子トイレに強制移動させた。

少年には悪いが暫く放置である。

「ほら、個室に入っで。スカート洗うから」

「うん。悪いね」

「それよりいきなり脱ぐな」

それから麦野は無言でスカートを洗い始めた。クリームはまだ固まっていなかったから直ぐに落ちた。皺がつかないように丁寧に絞る。雑巾絞りなんて厳禁だ。

それから空気乾燥機にスカートを突っ込み乾かしていく。

学園都市が誇る空気乾燥機は濡れている物に合わせて風圧、温度を変え素早く乾かす優れたもの。後三分もすれば乾くだろう。

「すまないね」

「……まあ、今回だけだと思う」

「そうだ。君はさつき化け物だと言っていたが、最初に居た彼と一緒に居たときも今も君は普通の女の子に見えるよ」

その言葉に麦野の身体が固まった。

息を飲む気配を感じた木山は言い聞かせるように麦野に囁く。

「君は君が思っている以上に女の子だよ。だって麦野さん、彼のと好きなんだろう?」

「はあっ?!なに言ってるの。アレはそんなじゃない!上条は……」

萎んでいく声に木山は小さく笑った。

「何について悩んでいるか私には分からないが、有耶無耶してしまえば、多分君は後悔する。好きか嫌いか。特別か友人かの区別はしておいて損はないはずだ」

「っ!うるせえ!」

麦野は乾いたスカートを個室に投げ込んだ。雑に扱った割には木山は怒ってなどいなかった。

「綺麗に乾かすね。皺が全然ない」

「ふん!」

「素直じゃないのも青春か……」

どこか悟ったような響きに麦野は久しぶりに子供扱いされて戸惑った。精神面で比べたら恐らくこの人に適わない。そう納得させるだけの何かがある。それは傷ついた者を包み込む母性のようなものなのかもしれない。

麦野はこんな人がすこぶる苦手だ。境界線を見無視してズカズカ割り込む奴は大っ嫌いなのに、また違う強引さには戸惑ってしまう。

木山は個室から出てくると顔だけじゃなく耳まで真っ赤にした麦野を見て微笑んだ。

「やっぱり青春だね」

「次なにか言ったら真っ二つにするぞ」

「む、それは凄いな」

「驚くな！」

まったくもって苦手である。

「車を探しに行こうか」

「まさか、手伝って？」

「そうだが？」

当たり前だと言わんばかりの木山に麦野は肩を落とした。もう抵抗する気力も皆無だ。



「分かったわよ。はあ……」

溜め息が最近多い気がする。

「まったくなんで駐車場を忘れるかな」

「でも無事に見つかったよ有り難う麦野さん」

そう言つて木山はエンジンをかける。

麦野はその車を凝視していた。ランボルギーニ・ヤガルド。イギリスのスポーツカーであり、ガルウィングドアのタイプ。しかもかなりの高級車だ。

コイツ、ぼーっとした見た目の割には凄いもんに乗ってんだな。と言つのが麦野の素直な感想だった。

「教鞭を取っていた頃を思い出して楽しかったよ」

「へえ、なら今はなにしてるの？」

「ああ、AIM拡散力場を主に大脳生理学を専攻とした学者だよ」

「学者さんね。でもアンタ学者よりも学校の先生が似合ってるよ」

麦野の言葉に木山は嬉しそうに目を細めた。

「そうか、そう言って貰えて嬉しいよ。またどこかで」

「その時は車無くしてないでよ」

うんざりしたように言ったら木山も苦笑した。

「善処しよう」

それだけを言うと彼女は車をゆっくり発進させた。見栄えのいい車は直ぐに見えなくなり麦野は今日一日が、長く思えた。

「帰るか」

麦野はすっかりパーティーの事を忘れて自宅へと、その歩を進めた。

帰り道の出来事（後書き）

なんか書くこと無いので皆様に質問！！（今回の小説の後付けくらいしろッ！）

皆様の好きな歌手は誰ですか？（この小説と全く関係ない？！）

パーティー

パン！と何かが破れる音がした。

「おかえりー！そして退院おめでとう」

「超退院おめでとうございませす！」

それはフレンジと絹旗が麦野にクラッカーを向けて紐を引いたからに他ならない。

目を白黒している麦野に二人は近寄り家にかかる事を促した。

「ほらほら、早くご飯食べようよ」

「上条も麦野の為に料理を超作ってるんですから」

「いや、ここ私の家よね？鍵は閉めてきたし、なんであんな達家に入ってるの？」

麦野の疑問にフレンジは自慢するように答えた。

「フフン！窓の鍵までは閉めてなかった訳よ。そこから入って内側から施錠を外しただけ」

「泥棒紛いな事やって誇るなッ！」

「イタッ！」

勢いよく頭を叩いた麦野はブーツを脱ぐとフローリングの床にスリッパを出して迷うことなくリビングに向かう。

魚を焼いているような匂いが麦野の空腹感を刺激した。

「ただいま」

「あ、お帰りむぎの。待ってて、鮭が焼けたら食べよう」

食器を並べる滝壺は一度手を止めると、出入り口を見る。しかしそこには誰もいなかった。本来なら麦野がそこに居るはずなのだが、麦野は鮭と言う単語に反応してキッチンに走り出した後だった。

滝壺はリビングから見えるキッチンを覗き込む。

「かーみじょう！鮭焼いてるってホント？」

麦野が上条の背中に抱きつきながら鮭を焼いているであろうグリルを見つめた。

「おわ！今焼いてるぞ。それより麦野ちゃんと手を洗えよ」

「はいはい」

軽快な足取りで麦野は手を洗いに行く。上条は鮭の焼き加減を見て、ひっくり返す。

その時、滝壺が隣にやってきた。

「お皿…終わったよ。ピザ持って行くね？」

「ああ、頼む」

「むぎのの胸、柔らかかった？」

「ブフオ！？た、た滝壺さんなにをいつているんですの?!」

青天の霹靂ともいえる滝壺の発言に上条の口調は、どこかの風紀委員ジャッジメンになっていた。正直、似合わない。

「私も一度、むぎのに抱かれた事ある。その時とっても柔らかかった」

懐かしそうに語る滝壺を目尻に上条は口元を押さえた。

確かに柔らかかったと、上条は思う。しかし本人が聞いたなら百回はぶち殺し確定だ。

「かみじょうは、どう思う？」

「……これは拷問ですか？」

「質問です」

真面目な顔で質問すれば真面目な顔で返答してくれた。だが、上条にとってはちっとも嬉しくない。

「柔らかかったです」

「なにが？」

「胸、とか。でも全体的に柔らかいと思うぞ。男女差かな？あといい香りがした」

「へえ」

「髪なんて細くてサラサラで柔らかいし、麦野って美人だよな。ん、そろそろ焼けたな。えっとグリルは水に浸けとくか？」

「うん。その前に歯あ食いしばれ、かーみじよお！」

上条の全身の血が音を立てて引いた。油の切れた人形のように錆び付いた動きで振り向けば、そこには素敵な笑顔の麦野がいた。

視界の奥では滝壺はテーブルにピザを置き、サラダをかき混ぜフレンドと絹旗の皿に盛り付けている。三人は我関せずといった具合だ。

「麦野、これは、その！」

「……………食べるわよ」

それだけ言うと彼女は何もせずリビングに向かう。首の皮一枚で繋がった上条はその場にへたり込みたくなかったが、焼き鮭を皿に盛って4人の居るテーブルまで運んだ。

そして椅子に座ると斜め前の滝壺に囁く。

「滝壺、やってくれたな」

「私は質問しただけ。はい、サラダ」

「サンキュー。ほい、ピザ」

代わりにピザを滝壺に渡す。滝壺は受け取ると、ありがとっ、と囁きピザを頬張る。

「ミートソースパスタが美味しい訳よ！」

「上条さんの自信作だからな。ピザは滝壺が作ったんだ」

「うん、生地はかみじょうも手伝ってくれた」

「超料理ができるんですね」

絹旗はサラダをつつきながらしみじみと呟く。

「きぬはたもやってみる？」

「いいんですか？」

「うん、いいよ。ポテトサラダから作ってみよう」

滝壺の提案に瞳を輝かせた絹旗は嬉しそうにサラダを食べる。その様子にフレンドはやれやれと言った感じで茶化した。



「結局、絹旗は子供な訳よ」

「フレンドなんか超言われたくありません！」

「ほら、食事中に喧嘩しないの。フレンド、私にもパスタ取って」

麦野がフレンドに取り皿を渡し、フレンドはパスタを適量盛ると麦野に返した。

さっそく麦野はパスタにフォークを差し込む。それから上品に巻き上げると、これまた上品に食べた。その姿を見て上条は彼女が良い家柄のお嬢様なんだと思った。

「うん！美味しい。上条は料理もできるの？」

「いや、パスタは安売りしてたりするからそれでよく作ってただけだ。レパートリーはそんなに多くないかな？麦野は料理するのか？」

「するわよ。外食ばかりだと栄養バランスが偏るから。それに料理を怠ると女は男より悲惨になるものなんだから」

それを聞いてフレンドは溜め息をついた。

「はあ…料理をしてないのは私と絹旗だけか……」

「今度から私、料理を超やります」

「なら、またみんなで食べたいな」

上条の言葉に四人は笑顔で頷いた。『アイテム』の皆もこんなに楽

しい食事と言うのは初めてかもしれない。ファミレスで集まっても好き勝手に料理を頼んだり、二名は外から持ち込み同じ料理を食べたという出来事も今日が初めてだ。

「なら私はその時超作ります！」

「私も手伝おうかな」

そして雑談に花を咲かせつつ食事をしていた上条は麦野が取り出したボトルが目にとまった。

「ふっふっふーん」

なにやら嬉しそうに シュワシュワと音が鳴る薄ピンクの液体をグラスに注ぐ。

それを見たフレンドが自分もと言わんばかりにコップを差し出す。

「フレンドこれジュースじゃなくてシャンパンよ？」

「分かってる分かってる。でも飲んでみたい訳よ」

「飲むなよ未成年だろ！」

「気にしない。気にしたら負けよ」

麦野は上条の注意を適当にあしらいつレンドのコップに半分注ぐ。その量にフレンドは不満足に麦野を見た。

「先ずは半分。それが駄目ならアンタにはまだ早い。滝壺は酔った

ら面倒だし、絹旗なんて論外ね。上条はいる？」

「謹慎処分にされたく無いからパス」

あっさり断った上条に麦野はつまらなそうな表情をした。しかし当たり前前の判断なのでそれ以上何も言わずグラスのシャンパンをフレンドのコップに軽くぶつける。

硬質な物同士が短い音を鳴らす。

「乾杯」

「かんぱーい」

麦野は広がる味を楽しむように少量含んだが、反対にフレンドは一気に飲みした。いくら量が少ないからと言って飲み干したフレンドに絹旗は有り得ない者を見るような視線を送った。

「超なにやってるんですか」

「んー、思ったほど美味しくない」

一応彼女なりに味わったがいまいちだったようで、麦野はフレンドのコップに水を注いだ。

「ならフレンドにはいらないわね。滝壺は少しだけ飲む？」

「うん、もらっ」

「どっぞ」

麦野は身を乗り出して滝壺のコップにシャンパンを注いだ。フレンダと違いたっぷり注いでやる。

「乾杯」

「乾杯、むぎの」

二度目の乾杯は静かだった。二人は喉を通っていく冷たい液体のさつぱりとした味を楽しみ、腹に溜まるにつれ熱くなる感覚に恍惚の表情を見せた。

「あ、いいわ」

「美味しい…」

「超理解出来ません」

そう言いながらピザを食べる絹旗の頭を上条はゆっくり撫でた。

「いや、まだ分かんなくていいぞ。いつか飲める時は来るけど飲むかは絹旗次第だ」

「不味いから超飲めません。ウニ頭は美味しいと思います?」

「うーん、飲んだことないからわかんねえや」

貧乏学生をやってきた上条には、この学園都市で出回る酒の高額さは知っている。手を出せたもんじゃない。

大人の目を掻い潜り手に入れた酒は学生の間では、学園都市の外でいう麻薬と似た扱いだ。

それに上条自身、酒を飲んでみたいと思っただけのことがない。

「むぎの、もう一杯」

「これで最後ね」

「うん、それじゃ」

「一気飲みね！」

それを止める暇なく二人はグラスの中身を一気に呷った。恒例なのか、麦野と滝壺はハイタッチをする。

「むぎの、今度は何を飲むの？」

「ワインでもいっとく？」

「白ワインがいいな」

「りょーかい、任せなさい！」

軽く麦野はウィンクをすると椅子から立ち上がった。

「さて、ごちそうさま。風呂を溜めてくるから食器下げといて。後で洗うから」

「それなら俺がやるのか？」

麦野は一度立ち止まると首を横に振った。

「食器棚とか、食器の置き方が違つとそれだけでイラツとするから駄目。私がやるわ。好きに寛いでて」

「はい」

「フレンド、食器下げの手伝つて」

「それじゃ、上条は絹旗よろしくね」

フレンドと滝壺はキッチンに消え、絹旗と上条はチラリと見つめ合つた。

「超なんですかウ二頭」

「やっぱりそうとしか呼ばないの？」

「この呼び名、超気に入ってるんです」

「分かつたよ。なら突つ込まねえ。テレビでも見るか？」

上条はリモコン片手にソファーに座ると絹旗も隣に座る。

「見ます。上条はお泊まりするんですか？」

「随分長居したな。帰るにして遅い……」

「廊下で寝て下さい」

「お前俺の扱い酷くないか!？」

絹旗は笑いながらリモコンのボタンを押す。特に面白い番組がないので自然とニュースを見る形になった。

ニュースは最近、謎の爆破事件の様子を伝えている。何やら重力を操作してアルミを爆弾に変えているそうだ。負傷者も何人か出ているのに犯人は未だ不明。警備員と風紀委員は総力を上げて捜索している模様。

下らない、と上条は素直にそう思った。

「なんでこんな事が起きるんだろうな」

「子供が爆弾を超持つてる様なもんです。深くは考えてないんですよ」

テレビが報じる事に談義していると麦野がそれを見ながらソファの背もたれに体重を掛ける。

「能力が上がって試し撃ちがしたいんですよ。私にもあったわ」

「まさか人を……」

絹旗が真っ青になって呟いたのに対して麦野は平然と答えた。

「取り壊し予定の廃ビル目掛けてドバーンだった。大きな音を立てながら崩れていく様は爽快よ」

「いや、それは」

迷惑なのかそうじゃないのか分からない。

そして絹旗は別に試そうとは思わないらしい。

「布団出しといたから。勝手に寝なさい。上条は、どうしようかしら」

「あれだつたら帰るぞ」

しかし上条の提案に麦野は悩んだ。

「時間も遅いし警備員アンチスキルに見つかった大目玉よ。止まって行きなさい。部屋は、私の所くらいかな」

「え？」

「勿論、床よ。毛布くらいならあるから心配なく」

心配などなさそうな麦野に上条は慌てて否定した。

「いや、別の所を心配しろよ！なにかあったらどうするんだ」

「何かする気な訳？」

そう質問したのはフレндаだった。

彼女は慌てふためく上条を半眼で睨む。



「そこまでしないぞ！」

「むぎのに何かするかみじょうは応援できないかも」

さらに滝壺まで見放す一言に上条はうなだれた。

「俺、どうすればいい？」

「だから、廊下で超寝れば万事解決」

「やっぱり絹旗、俺に恨みあるだろ？」

「さあ？」

絹旗の頬を引っ張る。彼女は抵抗しようとして上条の右手を引き剥がそうとする。しかし能力は発動しなかった。

「ひよっと！超なにしたんねすか！」

「んー、聞こえないな！ハッハッハ！」

「むううー！！！」

暴れ出した絹旗は上条の下顎目掛けて頭突きした。

「ゴフツ！」

「ふん！ウニ頭が超悪いんです！」

「あらあら、舌は、くっついてるから大丈夫か」

ソファーに倒れた上条の容態をフレンドは調べたが命に別状はない。そこに麦野の声が飛んできた。

「あんた達風呂に入ってきてなさい！」

食器がぶつかり合う音がする。ついでに水の音もだ。

それにフレンドと絹旗は応えた。

「それじゃ入りますか！」

「麦野のお風呂は超広いから大好きです」

「かみじょう、置いていくね」

上条を放置すると三人は風呂に向かって行った。

麦野は皿を洗い終わると、顎を撫でる上条の隣に座る。

「なにやってんの？それに私にあの人押し付けた後どこに行ったのよ」

「あれは本当にごめん。ビリビリに追いかけて長距離走してたら滝壺達と出会って事情説明して助けてもらったんだ。そしたら手料理を作るって滝壺が」

「ふーん。サプライズ含めて連絡なしって訳か」

納得した麦野はソファーに寄り掛かった。それから天井を見つめな

がら目を細める。

あの時、木山春生に言われた事が蘇る。

好きか嫌いか。特別か友人かの区別はしておいて損はないはずだ

私はコイツをどうしたいんだろ？嫌い、じゃない。特別？確かに自分の周りに居ないような奴だとは認める。

だけど、それだけで特別かどうかは分からない。ただ、落ち着く事は確かだ。安心する。

この思いが特別なのだとしたら

その瞬間、麦野の顔がボツと赤くなった。

「どっしした麦野？」

覗き込む上条に麦野は思わず悲鳴を上げそうになったがぐっところらえて、少し距離を取りつつ咳払いをした。

「なんでも無いわよ。……その上条は、私のこと、どっし思っ……さっきさ、……えっと美人、だって」

「あ……」

麦野の気恥ずかしそうな雰囲気に触発されたのか上条も真っ赤になり、口ごもりながら言葉を紡いだ。

「その、あん時言ったのは本当に本心だ。お前は、否定とか……するだろうけど、麦野は」

ピリリリッ！

無機質な電子音がすべてを崩壊させた。その音は麦野のポケットから聞こえる。

ピリリリッ！

二人の時間が僅かに止まる。

ピリリリッ！

「誰だテメエこんな時間に電話してんじゃねえぞ！！間違い電話ならブチ殺した！！」

「ちょっと、こいつってやつはー！仕事よし・ご・と！アンタになんか用事が無かったら電話なんてしないから！！むしろ通話料金返せっ！」

妙に甘ったるく、媚びたような女性の声に麦野は心臓が跳ねた。

「さあ、今回の場所は」

視界の隅で上条の表情がみるみる怪訝なものになっていった。

止めて……

止めてッ！……

そんな目で見ないで……

築き上げた心が踏みにじられた気がした。

たった一本の電話で……

パーティー（後書き）

前回の質問に答えてくれた皆様有り難う御座います！

感謝感激です！

私の好きなアーティストは

YUI

坂本真綾

牧野由衣

志方あきこ

ポルノグラフィティ

BUMP OF CHICKEN

などなど

今回の質問は

小説の描写、もっと詳しくした方がいい。

か×

はい、いいえ

YESかNO

で、お答え下さい(冗談。好きに答えて下さい)

## 乖離現象

「この前の任務で抹殺命令でしたでしょ？その依頼人がやっぱりヤバい奴でさー」

いつもならこんな聞き流したって暗記できる。なのに今、それが出来ない。指が震える。

怖い、怖い。

人間でいられた時が終わりに近づくのが、とても怖くて。

この電話一つで、私は闇の中に沈む化け物なのだと思います。

「麦野、お前まさか」

「ごめん。ごめんね上条」

携帯を遠くに置き出来るだけ音声を入れないようにする。ついでにゆっくりと離れると腕を掴まれた。

暖かくて優しい、力強い腕に気づけば抱かれていた。

「行くな。お前には人殺しをさせたくない」

「……なら、上条は私の為に血を被ってくれろ？人を殺せる？吐き気がしなくなるくらい死体を見れる？……仲間が裏切ったら躊躇なく殺せるの？」



無感情に凍えた麦野の声に上条は呼吸が止まった。平坦に紡がれた言葉の中身は余りにも残酷で、最後の一文にはまた別質の感情が覗いていた。

裏切られた事がある。仲間に。生きるか死ぬかの世界だ情報提供どころか、背中を刺されたのかもしれない。

今まで感じてきた疑問が上条の中でゆっくり確証に変わる。

「俺には出来ない、だけど！」

「ごめんね上条。そうだよ。だってあんたは」

麦野は上条を腕の中からすり抜け逆に上条を抱き締めた。

そして、一言を囁み締めながら耳元で囁いた。

「優しすぎるんだ」

「アガ!？」

肉を強く打つ音が上条の鼓膜と頭を揺らした。意識が霧散して行く。

麦野は上条を気絶させ、ソファーに寝かせると携帯を手に取り玄関まで歩き始めた。

「場所はどこだ？」

「こいつってやつはー。やっと終わったか。ねえねえ、さっきの男の声って」

「場所はどこだ？」

感情がすっぱりと抜け落ちた声に電話の女は口を噤んだ。何時もの麦野なら烈火の如く怒り狂ってもおかしくはない。もし初めて麦野と話す者だったら深く言及しただろうが、そこそこ付き合いのある女は電話口で冷や汗をかいた。

麦野はもう怒っているだとかそんな問題じゃない所まで感情が揺れている。

自然と感じられる殺気の塊に女は喉元にナイフを押しつけられたような感覚に陥った。

だから女は麦野の欲求に静かに答えるしかない。

「第17学区よ。詳しい地理はメールで知らせる。今回の仕事内容もね」

それだけ伝えると、前置きなしに通話が切れた。その時、嫌な汗が噴き出す。

女は深く椅子に座ると黙々とメールを製作し始めた。

麦野は一人で暗部が仕様する車に乗り第17学区を目指していた。運転手は一言も話さず、無言と静寂が重苦しく支配する。

その中、麦野は携帯の液晶画面の文字をスクロールさせ、文を読み進めていた。

内容は、一部の暗部組織が“とある事”に備えて秘密裏に機材を集めて何かを作っているらしい。

詳しいことがぼかされているのは、それが暗部よりも恐ろしい闇の一端があることを示唆していた。

ならば、相手のやろうとしている事に手を出さない方がいいと麦野は思った。知れば学園都市の全てを敵に回す事になるだろう。

「止める」

短く命令すると男は急いで車を停止させた。

麦野は降りるとそのまま研究所のような所に入る。

殆どが全自動の機械で溢れたこの学区には殆ど人などいない。その中で煌々と光を放つ場所は否が応でも目立った。

白い壁に囲まれた世界に静かに靴音が響く。

真っ直ぐの廊下を進んだ先には両手押しの扉が鎮座していた。

それを麦野は 原子崩し の一撃で粉碎する。オレンジ色に溶けた

穴に麦野は悠々と入る。一瞬だけ熱い空気が出迎えた。抜けた先の広い空間には男が二人唾然として固まっている。麦野はその内の一人に無表情で 原子崩し の光閃を撃った。

跡形も残らず消え去った仲間に残された男は腰を抜かし、助けを求めようとする前に、腹を蹴られた。

「グエツ！」

「さあて、取り敢えずリーダーどこかしら？下らない抵抗したら四肢のどれか焼き切るぞ」

「た、助けてえー!!」

「はははははははははは！助けてなんて暗部の奴なら言わないだろ。……リーダーはどこに居るの？」

その問いに男はガチガチと歯を鳴らす。恐怖が舌を強ばらせた。

「お、お俺達下っ端、に……聞くなよ」

「あっそ」

突き放したような言葉と同時に男の上半身が消え去った。悲鳴や絶叫は発せられる暇さえない。

無感情に人を殺し。人の命にとことん無関心になった麦野は亡霊のように歩き出した。愉しめない。命を貪り食い散らかし、残虐の限りを尽くしたって。相手がいつそのこと殺してくれと懇願するまで甚振っても、今の自分はこの状況を悦べない。

吐き気がする。肉の焼けた、血生臭い臭いが肺腑を抉る。

「っー」

頭をかち割られたように痛い。

何かが自分の中で蠢く。

……あつはははははは！殺せよ！狩られるだけの家畜に情でも湧いたか？あの野郎に絆されて温くなりやがってよ売女あ！？

………違つ！

愉快に尻振りやがって、それでも暗部に君臨した女王様かよ？  
実は人を殺したくない乙女だなんて、………言えねえよなあ？何人殺した？思い出せる？

………黙れッ！

壁を殴りつけても脳を引つ掻き回される痛みは一向に晴れない。か  
細い呼吸音を繰り返しながら麦野は奥に進んでいった。

戻れない道に進んでいく。

なあ、早く私に喰われる。そしたら楽になるさ。痛くて苦しい  
でしょう？

………なんなのよアンタ？

酷いわね。忘れたの？いや、アンタのせいじゃないか。お前が  
“人間”で有るために切り離された　　だよ

………？聞こえないけど

アア！つたく面倒臭いことしやがって。こんなとこまで制限す  
んのかよ！忌々しい奴だ

………何で私の中にアンタが居るの？

それはお前が思い出せ。でないと私は外に出られないもの。そ  
れじゃなきゃ早く喰われる

………本当にさっきからそればかりね

震える手で手すりを掴みゆっくりと麦野は階段を下りた。地下に繋  
がる道は次第に薄暗くなっていく。

最後まで降りるとロボットを製造する為の機材が収容された部屋に  
ついた。

ん？ちょっと借りるぞ

「！？」

身体が勝手に右に跳ねた。すぐ後ろの壁が鋭い音を鳴らし火花を散  
らす。

銃弾だと理解する前に麦野は機材の後ろに身を滑り込ませた。

三人か……

……確かにそうね

立て続けに連発される弾丸の感覚は複数人のもので、麦野はそう簡単に物陰から出られなくなった。

身体を貸せ。全員殺せばいいんだろ？

……二度と身体が戻ってこなさそうだから却下

銃弾の量が減ったのを感じ、麦野は 原子崩し を四方八方にぶち撒けた。広範囲を殲滅させた光の軌道後は金属はドロドロに溶け、見た者を畏縮させる。

「あが、… あがああああああああ！！！！」

「ゴオアアアアアアアア！！！！」

下手くそ。一発で三人くらい仕留める。テメエの精神だけには介入出来ないんだ。身体を少しだけ貸せ

……… 断る

はあ？非効率なんだよ！テメエは指くわえて見てろ！

それは今のお前の状況だ、と言いたかったが麦野はその言葉を飲み込む。言ったら絶対に面倒な事になる。

今、失礼なこと思わなかった？

……… 何も無いけど

それだけ言うと麦野は闇を走り出す。直ぐさま銃弾が壁や床を削った。最後の一人は既に狙いを麦野に定めているらしい。

だとすれば、次に来るのは、

……… 火力のデカイ重火器か砲撃！

麦野は物陰から走り出す。相手は銃を乱射してこない。それでも走り続けていると麦野の直ぐ後ろで爆発が起きた。

「ぐあっ！」

熱風と爆風に煽られ宙を舞う。シャレにならない衝撃波に肺の空気が全て押し出され、床を無様に転がった。瓦礫が落ちていたらしく彼女の肉を歪に引き裂く。

「く、そがあ！」

莫大な光量の塊を打ち上げる。そして照らし出された狙撃者は武器を捨てて逃げ出した。

「逃がせねえぞおお！！テメエは私が上下左右にきちんと引き裂いてやるからよおッ！！！！」

迸ったのは怒りか、それとも 原子崩し の極光か。 若しくは、





「かみじょう風邪引くよ」

「ウニ頭、ソファで超寝ちゃったんですか？」

お風呂から上がった二人は麦野を探してリビングまで来たが、居たのはソファに転がっていた上条当麻一人だけだった。

「起こさないと……」

「超任せて下さい。…とうっ！」

「ぐぼっ！」

「ふはははは！超起きろ！」

「この絹旗！二度も人の腹に突進しやがってえ！」

病院と同じ起こし方に上条は激怒したが、

「ッ麦野！」

「うわぁ！」

飛び起きた上条に絹旗はバランスを崩しソファに尻餅をつくが、上条は気にしていられないようすで玄関に走り出した。

「待って！」

それを滝壺が追う。

咄嗟に上条の腕を掴み振り向かせると滝壺は彼の瞳を見据えた。

「落ち着いてかみじょう。……………むぎのに何があつたの？」

「麦野はたぶん、暗部の仕事つてやつをしに行った……………」

「……………むぎの」

上条の答えに滝壺は力が抜けた。彼女にしては珍しく驚愕の表情を見せる。

「第17学区だつてとこまで聞いた。だから迎えに行かないと、麦野は」

「待つて、今調べるから」

滝壺はそれだけ言つと携帯を取り出し素早くボタンを押した。そしてワンコールで出た人に矢継ぎ早に問う。

「『アイテム』正規メンバーの滝壺理后。リーダーむぎのを第17学区に連れて行った人は誰？」

「それなら、」

電話番号まで聞き出し滝壺は次にその男に電話をする。

出た奴に一言二言告げると携帯を閉じて滝壺は靴を履いた。Tシャツに短パンというラフな格好だが、気にしない。と言うより暑い日ならこんな感じだ。

「行こうかみじょう」

「絹旗にフレンダはどうする？」

「それなら超ご心配なく」

「バツチリ聞いてた訳よ。滝壺、こっちはこっちのやり方で麦野を探すから、滝壺に上条、よろしくね」

「うん。任せて」

「大丈夫だ。連れて帰ってくる」

夜の闇に飛び出した二人を見送り、フレンダは携帯を開き電話帳を開く。

いつも仕事を回してくる女に電話を入れる。しかし、

お掛けになった電話番号はただいま電波の届かない所にいるか

「結局、役立たずな奴！」

「もっと別の誰かに電話しましょう」

「シケてんな。最近の奴は齒応えがねえ」

返り血を浴びた栗色の髪をした彼女は死体の海に佇んでいた。真っ白で統一された部屋は大量の赤や赤黒い何かで斑に染められている。誰だか知らないが、転がった生首を蹴って壁に激突させ、また赤い領域を増やした。特濃の鉄と肉の臭いが立ち込める。

「ふふふ、あはははは！」

「やあ、愉快的かい“原子崩し”？」

間延びした声が彼女の鼓膜に絡みつく。その声は聞き覚えがあった。工業分野ではよく会った人物の声だ。彼女はこの女が嫌いだった。羊の皮を被った狼、そう思った。ニコニコ笑顔を振りまきながら、この惨劇に似合う死臭を纏うこの女が不気味で気持ち悪かった。

「なんだ、やっぱりこっちの住人かよ本名不祥」  
コトエラー

「あつは！そつだよ。ねえ、気分はどう？」

「最高だ」

「そつ。ねえ“原子崩し”君の能力を使った新しい方式が見つかったんだ。試してみない？」

紅を引いていない割に赤い唇が蠱惑的に囁く。

「へえ、そのうま味はなによ？」

「0次元の極点。宇宙の果てからも物を手元に呼び寄せ、気に入らないモノはその果てに飛ばす方式さ。面白いでしょ？」

ニンマリと笑う本名不祥とは対照的に原子崩しは獰猛に笑ってみせた。

「いいねソレ。教えてよ」

「ならついて来てよ。教えて上げる」

血臭の溢れた部屋から本名不祥は出て行く。原子崩しはその後を追った。

乖離現象（後書き）

いっぺん、間違えて消去してしまったら時間が掛かりました。すみません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2125x/>

---

とある奇跡の平行世界

2011年10月22日02時17分発行